

---

# 俺の妹がこんなに可愛いわけがない 8 巻っぼいの (地味子編)

ねりタケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の妹がこんなに可愛いわけがない8巻っぽいの（地味子編）

### 【Nコード】

N2343P

### 【作者名】

ねりタケ

### 【あらすじ】

あの日、校舎裏で黒猫から告白を受けた俺は、返事を返せないままにいた。翌日の夏コミ打ち上げでは色々とバタバタしたもの…  
…黒猫と桐乃の喧嘩も収まって一段落…のはずが、赤城のバカが瀬菜と駆け落ちしてきて…二人を家に匿うことになり…

目指せ麻奈実エンドで書き始めました、他のことは何も考えない。  
とにかく地味子最高……愛していると書いても良い！

## 第1章 1（前書き）

黒猫から告白された俺は      あの場合で告白しなかったことを後悔しているのかもしれない。あの時……俺はまた……選択肢を間違えたのだろうか？

7巻の続きのつもりで勝手に書いた。とりあえず地味子万歳。

地味子さんがかわいそうでたまらなくなつて、なんとか助けたいと思う妄想のままに書いた。なのに地味子さんが出てこねー！と怒られた。

至極最もなのもつと頑張ろう。

## 第1章 1

今、俺の目の前で、彼女　瀬菜が、目を閉じたまま、俺の手を待っている。俺は、その重みを感じながらそっと抱き上げ、ベッドに横たえた。

「綺麗だな……」

思わず、そんな本音が漏れてしまう。俺の言葉に、照れたように頭をこてんと転がして顔を背ける瀬菜。

くそっ……可愛いじゃねえか……胸だって大きいし……今着せられている服が薄手の夏物ワンピースというのもあって、体のラインもくつきりと浮かび上がっている。視線を逸らした先には、抱き上げたときにめくれたスカートの裾から、真っ白な足が覗いている。

透き通る肌って、本当にあるんだな　そんな、陳腐な感想しか浮かべられないくらいには、頭がやられちまったんだよ。真っ白なワンピースに、ふとあの日の黒猫の顔が、泣きそうな、真っ赤な顔が脳裏をよぎる。

罪悪感　でも、仕方ないんだよ！　こうなっちまったもんは！　もう……っ　……遅いんだ……。

今、俺は自分の部屋で……何をしているんだ？　あまりに非現実的な光景に、何もかもがどうでもよくなって、そのまま飛び込んでしまいたくなる……。

夢なら醒めればいいさ、でも、これは現実なんだ。今、俺の部屋で恥ずかしそうにベッドに横たわっているのは黒猫じゃなくて、こいつなんだ　。

……どうしてこんなことになったかって？　俺だってわからねえよ。だけどさ……人生とか、明日って、分からないものだろ？　俺だって……あの日の俺になんて言えはいんだろうな？　……そう、あの日。俺は、確かに黒猫　瑠璃と　なのに……言い訳になるかもしれないが、あの日から今日まで、俺がどれだけ大変だったか



黒猫が俯いた両手で、自分の体を抱きしめて何かに耐えている。

「おい……」

ここで男が何もしないわけにやいかなーよな？　いくらなんでもさ　そう覚悟を決めて黒猫に歩み寄る。手を伸ばせば届く所で立ち止まると、黒猫が俺の顔を見上げ……普段の黒の装いとは違うコイツが、本当の妖精みたいに思えた。

おい、そんな風に真っ直ぐに俺を見るのかよ？　おまえは、怖くないのかよ　いや、こいつも震えてるんだ、俺と一緒に　いや、俺なんかよりもずっとずっと大きな覚悟で、ここに来たに違いない。

「黒猫　」

「……　はい　……」

さあ、何をすればいい？　俺？　分かってるだろ……ビビってんじゃねえ！　ありったけの勇気を振り絞って、俺は黒猫の震える肩にそつと手を伸ばす。今、踏み出さなきゃならないのはどう考えたって俺の方だろ？

「……！」

「……っ！」

手が触れる瞬間、黒猫と俺が、震えた。自分の姿を後ろから見ているような、現実じゃないような……そんな感覚すら憶える。自分の足が、今どこを踏んでいるのかすら全く分からない。そして……ああ、こいつの肩……こんなに小さかったんだ……桐乃と背丈はそう変わらないのに、あいつよりずっと小せえ……。

「あのさ、俺　……　……　」

「……」

黒猫は、じつと俺の言葉を待っている。どれだけの時が過ぎたのか、それとも一瞬だったのか、それすら分からない。黒猫の震えは、いつの間にか止まっていた。　瞬き一つしないのな、オマエ　その顔をじつと見つめて、俺は……黒猫の瞳を……ん？

あれ？　今……ちょ……。

「……………」  
「……………」

えー……ちょ……。えー……。

「……な……何……」

気がつけば 俺の腕の中、と言ってもいいほどに俺と黒猫の距離が縮まっていて、その、彼女の向こうに。

「……………」

「……………」

「ど……どうもー？ みたいーな？」

「なんでいるんだよオマエはつつつつっ！！」

「……………！」

校舎脇に植えられた生け垣の傍に、デバガメが1人……というか、瀬菜だ。……どーしてくれんだよこの空気っ！ 滅茶苦茶いたたまれねえぞごるああああああ！ 責任取れっ！

「え？ あ？ あ、赤城さんつつっ！？」

「あ……えつとね？ 覗いてたんじゃないのよ！ ほら、なんか2人が珍しい時間帯にうろうろしてるし……私は、たまたま部室に用があつて……ね？」

あー……もういいって……つかどーすりゃいいんだよ……俺……！

「その……先輩？」

「なんだよ……」

どう言っただけか分からず、誤魔化すように苛立った声を吐いてしまう。てーか、多少は怒ってもいいよな？ なんか瀬菜が怯えるけど、オマエが悪いって。

「いえ……その……五更さんが」

「ん？ ……わあっ！」

いっ……今気がついたけど俺！ 黒猫のこと……抱きしめてたの

かよっ！ いやまで、その、これはだなっ！ あんまりのことでビツクリしてだなっ……断じて黒猫が白猫になって夕日に染まって幻想的で可愛いなーなんてエロゲちつくなこと考えてたら思わず抱きしめちつたとかそんなことは１ミリたりともないんだからっ！

「……その、ちょっと痛い」

「す……すまん……」

相変わらず真っ赤なままの顔をさらに俯かせ、ますます縮こまっ  
てしまう黒猫……。うつつ……。俺だっていたたまれねえよ……。どー  
しろってんだよこれ！ やっぱ責任とってよね！ ……そんな俺  
のいたたまれなさをくみ取るかのように、黒猫が俺の胸を押して俺  
から離れる。

「まったく……。どうしようもなく俗な連中ね……」

「うつつ……。ご免なさい……」

あー……。瀬菜のヤツ、流石にちよつとは反省してるみたいだな……  
しかし、どうせなら最後まで隠れてるとか、うまく空気を読んで  
欲しかったぜ……。あと、連中って誰と誰よ？

「悪かったわ、その……。五更さんも、ごめんなさい」

「いいえ……。いいわ、気にしないで。別に恥ずかしいことをしたな  
んて思ってないし、隠すような事じゃないし……。そうね、隠してた  
らいけないのよ、こういう事は」

俺は無茶苦茶恥ずかしいんだけど……。エロゲ買いに行った時より  
さらに辛いぞ。これより恥ずかしかったのって、お袋や麻奈実に秘  
蔵のブツを見られた時ぐらいだぜ……。いや……。そんな時よりキツいか  
もしれんくらいだ。

「ああ……。そうだな。瀬菜も、怒ってすまなかった。ちょっと言い  
過ぎたよ」

「そうね、女性には優しくしておいて損はしないものよ」  
いつも通りの、芝居がかった口調の黒猫。どうやら少し落ち着いて  
たようで、先ほどのような強ばり見られない。

「はいはい、俺が悪かったよ、今日のところは……な」

「……いいえ、そのまま聞いて」  
え？

「「え？」」

ちよつと、おま、何を。

「もう一度言うわ……私と、付き合つて下さい」

ええ あのこと。

「貴方のことを……貴方のことが、好きです」

…… あのこと…… あなたの同級生の赤城瀬菜さんが……ものすごーく居心地悪そうなんですが……何とかして上げて……いやマジで……なんつーか、あんまりオロオロしてるんで、こつちが落ち着いて来ちゃったよ。

「ありがとうな、黒猫」

「……本気よ」

「だろうな、ここまで言わせて『からかうなよ』なんて言うほど俺は駄目な男に見えるか？」

「ええ、割と」

さらりと酷いね！

「でも、それでも好き」

…… すいませんもうマジ勘弁して下さい……。

瀬菜のヒットポイントはとくにゼロよ！……俺もだけど！

……はあ……。

「分かったよ、おまえの気持ち……ちゃんと届いた」

「……そう」

「でもさ……その、流石に今ここで返事しろつてのは勘弁してくれないか……俺じゃなくて、あいつが憐れすぎるわ」

もう何も言えずにぐったりしている瀬菜を見ながらそう答える……  
「うーん、自業自得だと思うけどな？ オマエの場合。といっても流石にそろそろこの場から逃がしてやらないと……俺も辛いし、黒猫だって……多分、今は強がってるけど、ギリギリのはずだ……まるで、誰かさんみたいに。」

「分かったわ」

「ああ……ありがとう」

「はああ……」

露骨なまでに息を吐き出して倒れ込む瀬菜。おいおい……ひよつとして今の間、息を止めてたのかよ……気持ちに分かるけどさ。

「大丈夫かよおい」

「なんとか……まさか、こんなことになるなんて……」

「ふ……フン、どうせ、私の弱みを握ってからかおうとか思ってたんでしょ……いいザマね」

「もう好きに言つて、反省してるわよ……悪かった」

流石にいじめすぎだろうよ……とことんSだよなあ……コイツ。

桐乃とはS同士だからだろうな……ああいう風になるんだってよく分かるわ。

「その辺にしておいてやれよ、こいつだってこんな事になるなんて思ってたかったろうしさ」

良かった、俺もだいぶ落ち着いたみたいだ……なんだかホツとしたような、残念なような気持ちではあるけれど、笑いながらこいつらと話せる余裕が生まれたのを感じる……うん、もう大丈夫だ。

「瀬菜も……流石にグロッキーか？」

「そりゃ、まあ……そうですね……というか……」

「なんだよ」

「本当に付き合ってたんですね……むしろ、そっちの方が驚きですよ」

チツ……　　そういや、真壁君にも同じようなことを言われたな……　　やっぱそう見えてたのか……　　しかし麻奈実のことと言い、黒猫のことと言い、この兄妹もトコトン勘違いばかりしてやがるな。

「黙つとけよ？」

「さすがにこんなこと誰にも言えないですよ……全く」

「残念だったな、俺をネタに妄想できなくなつて」

「いえ？　　振られる彼女と本命の彼つてのは鉄板ネタですからアリ

ですよ？ 何言ってるんですか」

うんもつおまえ喋るな。

「分かってると思うけどさ」

「ええ、分かっていますよ……ゲーム研の仲間には黙っています」

「助かる」

「そうね……その方が良いかも」

俺の言葉に、黒猫も同意してくれた。

「でも、できたら早めにはつきりして、みんなには話して下さいね？ 五更さんそれなりに人気あるし、うやむやなままだと色々困りますから」

それは知らなかったな……てつきり、真壁君と一緒に、おまえが目当てだと思ってたよ。

「そうするよ」

「意外ね、貴方のことだから……『不純異性交遊は校則で禁止されています！』なあって、お約束を言い出すと思っていたわ」

あー、なんか復活したっぽいな、黒猫。でもオマエの物マネ似てないからな？ 麻奈実の声マネの時もそうだったけどさあ……でも、桐乃のマネは魂入ってたか。

「そんなこと言いません！ 第一……そんな校則うちにはありませんから！」

「へー」

「そうなの？」

あー、そうなんだ。あると思ってたよ俺、というか一度も校則見たことないかも。つーか誰も見ないだろアレ……読んでたおまえが凄いよ。

「まったく……それにもしそうだったとして……」

「何よ、まだ文句でも？」

「いいえ……？ 五更さんの言った通りよ『別に恥ずかしいことをしたなんて思っていないし、隠すような事じゃない、貴方が大好き』なんでしょ？」

わー……てか「大好き」なんて言ってたっけ？ でも口調も声もそっくりだようん、これは褒められて良いレベル。俺も真つ赤だけど……直撃受けた黒猫が固まっちゃってるからさー……もうね。

「あら？ 恥ずかしくないんでしょう？ 格好良かったわよ」

ニヤニヤと笑いながら黒猫にからむ瀬菜……。

あー、これ仕返しか……照れ隠しも入ってそうだけど……やれやれ……どうして俺の周りはいこう面倒臭いやツばかりなんだろうな？  
「んなつ……な……」

あー、流石に、再現されると辛いよね……うん、分かるよ……。  
俺もいたたまれねーもん……。

「それじゃあ、失礼します。先輩、五更さん……」

ああ、とつとと帰りやがれよ。

「おう、じゃあな。気を付けて帰れよ」

「ありがとうございます。お二人も……その、良い旅路を」

んー、なんかまだ、アイツもちよつと変だけど大丈夫そうだな。

……やれやれ……今のほんの数分……もっとか？ 全然わかんないけど、とにかく緊張したよ！ 色々！

「はあ……やつと行きやがったな……おい、おまえは大丈夫なのか？」

「ふ……ふん、何でもないわよ」

いや結構キテるだろ、おまえ……俺が言つのも変だから言わないけどさ……よく頑張ったよ。

「送っていくよ」

「そうね……もう暗いし。夜の眷属である私にはなんてことは無いのだけれど、エスコートさせてあげるわ」

「へいへい」

キャラ戻ったな……実は照れてるんだろ……俺もだけどなっ……でも、その方が不思議と落ち着くよ。

「ほら、行くわよ……」

二人並んで、校門の方へ歩き出す。なんか、こそばゆいけど……

こういうもどかしい空気も悪くないな。

「なあ、黒猫……さっきの話だけどさ」

「何？　今更すぐ返事するとか言われても……今度は私が困るわよ」  
ははっ、正直だな。おまえの顔　さっきとおなじくらい真っ赤  
だぜ？　夕焼けが沈んだつてのに、はつきり見えるくらいにな。

「ああ……分かった。はぐらかしたり、誤魔化したりしないよ。ち  
やんと考えてから、俺の気持ちを話すよ」

「ありがとう」

服が変わったせいもあるのか、なんだかすっかり白猫になっちゃ  
ったなあコイツ……なんて考えながら歩いていると、俺の手を黒猫  
が握ってきた。小さくて……柔らかくて……ホントに華奢な手だ。

不思議と……驚かなかった。そうなるような……そうするような  
気がして、その手を握り返していた。どっちから手を出したのか、  
分からないくらいに。

そのまましばらく無言で歩いて、黒猫の家の近く……下校の時いつ  
も別れる交差点まで差し掛かったところでその手がほどかれた。

名残惜しくて「じゃあな」と言えない。汗ばんでべたついた手の  
ひらが熱を持って　愛しい。ほどいた手の代わりに、さっきの言  
葉の続きを絞り出す。

「返事、だけどさ……そうだな、夏休みが明けるまでにきちんとす  
るよ」

「そうしてちょうだい。あまり長く引つ張られても困るし……第一、  
どんな顔をして貴方や『あの子』に会えばいいのよ」

「そうだな」

あたりはすっかり暗くなって、夏の熱気を忘れるような涼風が吹  
いていた。……もうすぐ、夏も終わりが……。

「分かっているわ、迷っているんでしょ」

「……」

「でも残念ね、私はあの悪魔と違って貴方を逃がすつもりも甘やか  
すつもりもないのよ？」

誰だよ悪魔って……というか勝手に迷ってるとか言うなよ？ 今なら、俺はさ……。

「逃げたりしねえって」

「ならいいわ……返事は急いと言ったけれど、今日はやめて頂戴」  
「急ぐんじゃなかったのかよ」

「明日、打ち上げでしょう？ 流石に……その、いきなりはね」

あー、そーいやすうだった。さっきの騒ぎですっかり忘れちゃったよ……そら色々気まずいわな。

「ははっ、そりやそうだ……分かったよ。じゃあ……また明日な、楽しみにしてるぜ！」

「ええ……また明日……おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

黒猫は、信号が変わったところで交差点を渡って帰って行った。家まで送っていけなかった五秒前の俺が齒がゆくて……そのまま黒猫の背中が見えなくなるまで、交差点に立っていたさ。あいつが、一度も振り返らなかったのが……ちよっぴり残念だったけど、すごく満たされた気分だったよ。

しかし……「おやすみ」とは言っただけ……寝るにはまだ早いなあ……てかさ、多分俺……今日寝られないぜ……どうしたらいいんだろうな……。

「ま、後で考えるか！」

そう独りごちて、そのまま全力疾走で家まで帰った。体育の時間以外で走る事なんて無いんだが……何かこう、モヤモヤとか湧いてくるものとか……色々……で、たいした距離じゃないのに、家に着く頃には汗だくで吐きそうにグロッキー……でもさ、こんな気持ちのいい疲れや汗なら、走るのも悪くないな。……タマにならな？

……あれ……どこかで……こんな感覚……ははっ、ねーな。俺の体育の成績なんて中の下だし、体育祭だって3位か4位、よくて2位だから……どこかの駿馬とは違うんだな、きつとき。

さあて……シャワーでも浴びて、今日はとっとと寝るか……。明

日は打ち上げだしな！　　ったく、今年の夏は色々ありすぎて疲れるな……まったく。

## 第1章 1（後書き）

7巻から後の展開を勝手に妄想して書きました。

4章予定の4分の1だけとりあえずアップ……頑張つて、一週間1章ペースでやっていけたらいいなあ……とりあえず、地味子さんくと麻奈実のためだけに書いてます。

妄想、願望なんでもござれ、勢いだけで推敲もしてないような拙作ですが、麻奈実のために泣いていただければ、作者が浮かばれます。あと、ネタバレも盛大に含みますので注意。

……麻奈実エ……

## 第1章 2（前書き）

桐乃達の喧嘩のせいで流れてしまっていた打ち上げのやり直し……  
ところが、沙織が思いついたゲームのせいで、俺達はどうしてもない  
ことに！

……っっていう妄想で書いた。反省はちょっとしかしていない。

[illegible]

「  
「  
「  
かんぱー  
ー  
い  
！」  
「  
「  
「

「京介殿、ちとお疲れのご様子ですが……よろしかったのですか？」  
「ん、いや……昨日はだいぶ涼しいかなーと思って窓開けてたらさ、  
やっぱ寝苦しくってさあ……網戸の隙間から蚊も入って来るわで」

「ははあ、それはよろしくない。まだまだ暑いですからなあ……夏バテには気を付けませんと！　とりあえず、この辺のお菓子など栄養が付きそうですぞ？」

「うわ、なんか臭そう……アンタそれ食べた口で喋らないでよね」  
相変わらず俺には容赦なく酷いねオマエ。

「……っか……コレ買ってきたのオマエじゃねえか……　なんでそんな文句が出るんだよ！」

「え？　だつてめるカード付いてるし」

うん、分かつてたけど。だつて袋にめるちゃんとタナトスが描かれてるし！

「低俗ね……こんな幼稚なオマケに群がるなんて、むしろ可愛らしいというべきかしら？」

「はあ？　マスケラはこういうの出してもらえないからって僻まないでよね！　幅広い層に受けるからこそ、お菓子にもなるんじゃない。子供にも大人にも受けるつてのがアニメの良いところでしょ？」

相変わらずだねおまえら……苦笑しながら袋に手を伸ばすと、向かいに座っていた沙織と目があつた。「いつも通りでござるな」「ああ……よかつたよ、ありがとうな　「不思議と、コイツとは言葉が無くても通じ合えるんだよな……」実の妹とは全く全然欠片も通じ合えないのにな！」

「ははは、お二人ともそう言わず、とりあえず食べてみないことには……意外と美味しいですよぞ」

「ん……カロリー高そうだから……ちよつとだけなら」  
いやだから買ってきたのオマエだよな！

「あら？　夏太りでもしたの？　大変ね……」

「しねーつての、アタシは運動もガンガンやるし、カロリー計算だつてしっかりしてるつての、モデルなめんな」

うん、その辺はコイツしっかりしてるんだよなあ……基本、お袋が作ったものは残さず食べるし（残すと親父が五月蠅いし）。お袋の料理はまあ……並……やや下……まあ、得意じゃないんだろっけど、カロリーまで考えてるわけじゃ無いしな。……そもそも朝からカレーと味噌汁出してくるし、小学校の時なんか、うっかりその事を話しちゃって結構笑われたんだぜアレ。……その事をこないだお袋に愚痴ったら（2日続けてカレーだったつてのもある）……

「何言つてるのよ？　最近流行つてるのよ朝カレー、スパイスが体

を刺激していいんだってば！ 時代が私に追い付いてきたでしょ？」

……なんて言ってやがった。……明らかに違うと思います母上様お元氣すぎです。

「まあ、おまえらみんな細いからな、多少食って太ってもいいんじゃない？ むしろ細すぎるだろ」

「うわ……キモ……あんた、妹の体のラインとか、なに普通に批評してんのよ……」

「……私は、多少食べても妖力の維持にエネルギーを消費するから……問題ないわ」

ああ……さいですかよ、ったく。でも男受けのする体ってのは、もう少しぼっちゃりしてるほうが良いんだぜ……例えば……うーん……瀬菜とか、麻奈実みたいなね？ そんな事を考えていたら、意外にも沙織から諭されてしまった。

「京介殿、男性の理想と女性のそのの違いは拙者も理解しておりますが、それを言うのは無粋というものです」

あー、よく言うよねえ、それ……。麻奈実に何遍も言われたわー……。そうだなあ……。確かに俺だって、細くても……。あやせたんみたいなのスタイルならばうちアリだし。

「そうかもな……。すまん、悪かったよ」

「ちなみに、拙者の体はモデルよりもグラビア向きのサイズゆえ、じっくり眺めて貰っても問題ありませんし、堪能して頂けますかと」  
「ブフウッ！」

吹いたじゃねーかてめえ！ いきなり何言いやがる！……突っ込もうとした俺の目の前で、沙織がしなを作ってニヤニヤと笑っている。くそ……。確かに、藤原紀香と同サイズと言っただけあって……かなり、色々良いよな？ つーかおまえ、中学生として色々反則だよ！？

「サイテー……」

ドスの利いた低い声で桐乃が睨んでくる。……今の、やっぱ俺が悪い流れかよ……。やれやれ。まあ、俺が悪者になっておまえらが楽

しんでくれるなら、それはそれでいいさ。

「はい……大丈夫？」

「ん……ありがと……え？」

「……！」

何気なく左側から差し出されたハンカチを受け取ったけど……なんか「大丈夫？」とか優しく言われるのって、珍しくないか……そう思うと、昨日のことが思い出されて、顔がカツと燃え上がりそうになる。……そーだよ……俺、昨日告白されたんだよなあ……誤魔化すようにハンカチで口元を拭う。黒猫らしい趣味の、刺繍の入ったレースのハンカチからちよっぴり良い匂いがして、……正直戸惑う。

「……」

黒猫の反対に座ってる桐乃が……なんか不機嫌だし……いや、いっつもこんな感じと言えばそうなんだけど。

「すまね、洗って返すよ」

「いいわよそのくらい、汚れを拭くためのものなんだから」

「そか、悪いな」

「……貸しなさいよ、アタシが洗つといてあげるから」

桐乃が俺の手からハンカチを奪い取って、自分の机の椅子の背にひっかけた。洗ってくれるのはいいけど……もーちつと素直に言えばいいのに。

「そう……ありがとう」

一年以上の付き合いでそんな桐乃の態度にもすっかり慣れた黒猫は　　今日はいつものゴスロリ服で、黒猫に戻っていた　　涼しい顔でオレンジジュースをちびちびと飲んで笑っている。心配してたけど……仲直りしたってのはどうやらホントみたいだな……これで一安心つてところか。

「さて、それではそろそろ余興と行きますかな……皆様、こちらをご覧ください」

沙織が、手に割り箸をとティッシュの空き箱を持って得意げに笑

っている。「何？　またゲームでもすんの？　……あ、もしかして……それ……」

「申し訳ないけれど……脱衣モードは勘弁して貰えないかしら……」  
うん、俺も勘弁。というかあの時一方的に被害を受けたのは、対戦者のオマエラじゃなくて俺だったよね！　言わないけどさ！

「ご安心めされ、それにこの部屋のモニターでは、ポリゴン対戦格闘をやるには少々画面が狭うござりますし」

確かに、パソコンのモニターで対戦もできなくはないけど、できればもうちょっと大きい方が良いかな……特に、ジョイスティックとか使う場合はなあ。

「んで、何やるんだよ？」

「よくぞ聞いてくれました京介氏……ここは拙者、色々悩んだのでござるが、やはり基本は王道、お約束なゲームを試みようと思うのです」

んー、何を言っているのかよく分からんから本題を言ってくれ。

「もったいぶらないで早く言いなさいな」

うん、俺も同感。

「はは、手厳しい……まあ、ざっくり言うと……きりりん氏はお察しのご様子ですが、王様ゲームですよ」

ああ、聞いたことあるある！　クラスでも合コンとか好きな一部の男子がよくやってるって言うてたなあ……正直、ちょっと憧れとかもあるな。だって俺、なんでかしらねーけど、絶対合コンとかの類に誘ってもらえないし……。一度、勇気を出して頼み込んだら

「……ああ……いや、そのオマエはなあ……悪いけど。……に悪いし」

……とかつて断られたんだぜ！　どっちかつーと垢抜けて無い自覚はあったけどさ、ああいう風に断られるとショックだよ……。

「聞いたことはあるけれど……あまり興味は湧かないわね。第一、アナタはそんなのもう、厭きているのではなくて？」

ん？　誰が……って、この中でそういうの経験ありそうなのは…

…桐乃しかいねーわな。最近あんまり行っていないみたいだけど、昔は時々モデル関係や学校の友人達と一緒にそういうところにも顔出してたみたいだし。

……親父に知れたらエロゲ騒ぎの再来だぜ……幸い、お袋が秘密にしてくれてるみたいだけどな……。ん？ なんかお袋、桐乃の秘密は黙ってるってズルくね！？ いまさらだけど……本気で田村さん家の子になるぞ！

「それなりにはやってるけど、別に興味はないからどっちでもいいわよ……ただ、エロ男が混じってるのがイヤ」

俺だよなそれ！ 男俺しか居ないし！ でも、さっきからの目線とか手つき見てると、俺より沙織の方が危なそうな気がするけど……気のせいかな？

「まあまあ、実は拙者も一度やってみたかったですよ……」

俺も！ しかし……いつもの不機嫌そうな桐乃や、エロ親父スロツトル半開きの沙織はおいとくとして……黒猫の方を見ると、やはり不安そうに……というか、沙織の様子にやや引き気味だ。うーん、だよなあ……。でも、俺ちよつとやってみたいんだよなあ。いやいや！ エロ目的とかじゃなく！ 単に興味本位だよホラ！ それに、大学入ったらこういうのやることになるわけで、やっぱぶつつけ本番より恥かかなくて済むし！

「京介氏は乗り気のようにござるよ？ やはり男の子ですなあ……」  
いやいやオマエ、何勝手に俺の心代弁してるんだよ！ 8割くらいしか合ってないよ！

「うわ……サイテー……」

「はしたない粗大ゴミね……」

とうとう生き物ですらなくなったか！ というか後者黒猫、おまえ昨日俺に告白したよね？ それも激甘なやつ……あれは俺の妄想だったのかよ！ なんか……何もかもが信じられなくなってくるぜ……。

「そんな京介氏の期待を裏切って申し訳ないのですが、やはり拙者

達もつら若き乙女でござるからして、あまりエロなのは困り申す……もとい……えっちなのは……いけないと思いますよ?」

いや、しねーから、そんな命令……エロゲじゃないんだから。

「そこで、拙者は考えたのでござるが……命令を拒否する代わりに、まあ、いわゆるギブアップした側ですな、負けた方は、勝った方が言わせてみたいアニメの台詞を言わせてみるというのはどうでござろう」

時々沙織と日本語通じなくなるな! 何したいのかよー分からん……さっき通じ合えたのは錯覚かよ!

「なるほど……つまり、恥ずかしい台詞を命じて、赤面して悶えているところを見て嘲笑すれば良いという訳ね……それは面白そう」「へー、ちよつと面白いかも」

あ、二人がいきなり乗り気になった。なんだかんだ言ってオタクだよなあ……こいつら。

「大学などでは、杯を干すなどの罰ゲームがよく用いられるそうですが、我々は未成年ゆえ、知恵を絞りました」

なるほどな、沙織のこういう「みんなをなんとか楽しませよう」という気遣い、俺は凄く好きだな……アメリカへ行ってしまったというコイツのお姉さんも、きつとこんな感じだったんだろう。

「でもさー、俺、あんまりアニメ詳しくないぜ?」

「その辺は申し訳ないでござるが、一人男性が混じっているのですから、役得の代償のハンデと思って頂くしか……。なんなら、映画やドラマの台詞でも構いませんし、このティッシュの空き箱に拙者厳選のセリフと罰ゲームを入れておりますのでこちらを使って下され」

「ああ……それでいいなら、構わないぜ」

「ありがとうございます。その代わり……と言ってはなんですが、多少エッチな命令を出しても構いませんか?」

出さねーって、ったく。あー……なんかまた桐乃が蔑んだ目で見

てるし……。おまえは兄貴をどんな目で見てるんだよ？………  
…いや、そこ、ほら、あの時の件は俺が全面的に悪かったけどさ！  
流石に妹にやらかしちまうかもしれないような場面でエロいこと  
言わないって！

「へいへい、いいよそれで……おまえらは？」

両隣の二人　既にやる気十分の様子だったが、一応水を向けて  
みる。

「望む所よ……めるるの変身の呪文、振り付きで唱えさせてあげる  
わ」

「ククク……アナタが馬鹿にした厨二病台詞を必死で口にするとこ  
ろが見られるなんて……愉快ね……バジーナ、録音はあり？」

携帯を取り出す黒猫と不敵に笑う桐乃……鬼だコイツら、しかも  
自分が負ける気は全くないらしいな。

「流石にそれは……相手が良しとすれば、ということだ」

「アタシは良いわよ？　別に。むしろ残して笑ってやりたいし。ア  
ンタちよつとカメラ持ってきてよ、こないだ買ってきたヤツ」

「ああ……アレね？」

うん、そーだよ。オマエ（黒猫な）と一緒に買いに行ったヤツ。

「なんでも良いから早く取ってきなさいよ」

「へいへい……録音は、おまえのiPOD使うの？」

「え……」

「いや、押し入れにあつたヤツ」

「あ……あれは……その、録音できないし、古くて電池切れてるか  
ら」

あ、そーなんだ。しかし我が妹様はほんとナチュラルに俺を使っ  
てくれるなあ……。

そして、隣の自分の部屋に戻ってカメラを持ってくると、既にテー  
ブルの上は片付けられ、準備万端といった様子になっていた。

「おお、京介氏、準備は出来申した……　さあ！　いくでガンスよ  
！」

戦いが始まった。

「……では、2番が3番にしっぺ」

「あー、3番拙者でござる……」

「2番は私ね、ほら……手を出して頂戴」

ぺしつ。なんか可愛い音だな。

「じゃあ次……王様はアタシね！ ええと……1番が3番の肩を揉む！」

あ、1番俺だ。

「俺、1番だけど3番は？」

「私よ……ちょうど肩がこっていたの、お願いするわ」

へいへい……って、なんで命令したオマエが睨むんだよ桐乃……。しかし、そろそろ2巡したというのに、なかなか盛り上がらないな

……まあ、理由は分かっているんだけどさ。こう、口ではデカイ事言ってるもやっぱこいつら女子中高生なんで、命令が一々可愛げがあるというか……簡単なんだよ。だから、罰ゲーム以前に、危機感も無いわけで。俺？ いや、やっぱほら……ああは言っても……自重しとかなないとなあ……決して「命令されたら仕方ない」とか思っていないし！

「次は……あ！ またアタシ王様！ 今度は……ええと……えと……1番が王様の肩を揉む！ やっぱ王様が偉そうにしているべきよね、うん」

さつきと一緒にゃんよーその命令……。まあ……すぐ思いつくような命令しか出てないんだけどさ。

「拙者でござるな、それでは……失礼」

「え……あ、うん。……えと、よろしく」

何がっかりしてるんだよ、そんなに黒猫をこき使いたかったのかよ……ホント、仲良いんだか悪いんだか。

「ふうむ……イマイチ盛り上がりませんな」

桐乃の肩を揉みながら沙織がポツリ……。あー……言っちゃった。

提案者が言っちゃったら駄目だろそれ。

「……」

「……微妙ね」

「ま、まあまだ始めたばかりだしな？」

俺のフオローも、いまいち気持ちさがこもらない……まあ、実際微妙だしな。

「しかしきりりん氏、肩が凝っておりますな……兄妹揃ってお疲れか？」

「ばっ……バカなこと言わないで！ わ、私は、コイツと違って毎日朝練とかあるの！」

……？ 何真っ赤になってんだよ。知ってるってば、頑張ってるもんなんー。俺ラジオ体操より早起き絶対無理、麻奈実みたいなおばあちゃん……早起きらしいけど。

「それは失敬……しかし、揉みがいのある肩ですぞ。肌もすべすべで……」

おいこらそのセクハラ大魔神、セクハラの先輩として命じるが、今すぐ人の妹に対する不埒をやめるんだ。……ったく……これが同性の沙織だから良いようなものの……いや、待てよオイ、桐乃はこんな事してやがったのか！？ 御鏡とか、あの辺の仲間とかと……なんか、ム力つくな……。というか、桐乃も顔赤くしてるんじゃないよ。また風邪でも引いたのかってくらい赤いぞ。

「オイこらその変態、その手つきはエロいぞ」

「いやははは……つい、熱中してしまいました……しかし、少々手ぬるうございましたな。次からは、多少厳しくしていきましょう……いざとなれば、台詞に逃げられるわけです」

あ、そーだな。そう考えれば、さほど気にしなくてもいいか……タガの外れた俺を舐めるなよ、オマエら！

「じゃあ……次からハードルあげていこうぜ、構わないな？」

「そうね、このままじゃこの女の無様なすがたが見られないし……」

「ハ、それはアンタだってーの！」

はいはい、座れ座れって……いくぞホラ。クジを握った俺の手から、それぞれにクジを引いていく。……で、王様誰だ？  
「拙者ですな……それでは……」

2番と3番が両側からポツキーで

「ブフウ　ッ！」

「えええっ！」

「んなっ……」

また吹いちまったじゃねーか！　いきなりハードルあげすぎだこのバカ！

……恐る恐る手のクジを見ると……1番……ガツカリナンテしてないよー？

で、2番と3番は……？

「……っ」

「ほ……ほら……早くしなさいよ……」

桐乃が、顔を真つ赤にしたまま身を乗り出し、ポツキーを咥えて顔を突き出している。

「そ……そっちこそ……覚悟は良い？」

「は、言ってる」

器用に喋るね我が妹よ。俺の目の前で、妹と後輩がキスしそうな配置でポツキーの両端を咥えている。んー……シユールだなあ……。

「それでは……ガンダムファイツ、レディー……ゴー！」

沙織の合図と同時に、二人が両側から囓り始める。てか桐乃、おま勢い付き過ぎじゃね？

「ほらほらどうしたの？　怖いの？　ネンネねー！」

女の子がそういうこと言うな、てかおまえポツキー咥えたまま挑発とかホント器用だな！　ひょっとして慣れてるんじゃないだろうな！　なんか駄目だろそれ！　お兄さん許しませんよっ！

「んむっ……」

こっちは黒猫、端からちまちまと……ゆつくりとだが進んでいる。うん、これが普通だよな。既に半分近くを食べ終わった桐乃は、勝ちを確信したのか余裕の表情……てかおまえ、勝利条件間違ってるっぼいぞ。

「……」

「……」

とか考えてるうちに、桐乃の唇が待ち受けるほんの……2センチのところまで……ていうかもくすしてるようにしか見えねーよ！「いや……ははは……正直、照れるでござるな」

見てるだけでキツイなこれ、桐乃の向かいにいるのが御鏡とかだつたら、はっ倒してるわ。……あ……

「……！……」

ガシャ！と音を立てて、俺が持っていたコップが手から滑り落ちた。結露して濡れていたとは言え……見入りすぎてしまった……いやだって、ホントやバイんだって、二人とも顔真っ赤だしやば過ぎエロ……！

「京介氏……大丈夫でござるか？」

今度は、沙織がティッシュ箱　桐乃の部屋にもとからあった、動物のカバー（茶色のカバ）のやつを手渡してくれる。

「ああ、すまん。すっかりしてた……コップは割れてないし、中身はそんなに残って無かったから大丈夫だ」

「それは何より……あ」

「あ……」

「あつ……！」

ん、ああ……今のショックのせいか、二人の間にあったポツキーが見事真っ二つになって折れていた。

「こついう場合は……どうなるんだ？」

うわ、なんで俺を睨むんだよ桐乃！

「ふうむ……京介氏に責任を取って頂いてもいいのですが……それもなんですし……ここは一つ。両者失格と言う事で、きりりんさん

と黒猫氏に二人で台詞のかけあいなぞしていただきましょうか」

「……仕方ないわね」

「アンタのせいだからね！　憶えてなさいよ！」

知らん。

「では……そうですね……ファーストから行きたいところですがお二人はまだ若いですし、平成からいきましよう」

いやほとんど同年だから、つかやっぱりガンダムなのな。

「ガンダムX第1話、ジャミル・ニートの名台詞をやっていたきましよう……きりりん氏は女性クルー側をお願いいたします」

「ずいぶん差があるんだけど……まあいいわ」

えー、今ので分かるの？　俺ガンダムちよつとは知ってるけど聞いたことないよ。てか、黒猫も赤いけど……桐乃はさらに真っ赤だな……沙織め、どんな台詞を選んだのか……ちよつとドキドキだぜ。では……3……2……1……キュー！」

「コホン………」

ん、なんか妙に間が……あ、照れてるのが黒猫。

「い、いくわよ………」

『月は出ているか？』……っ」

いや、今まだ昼だし。

「は？」

って桐乃、その反応は冷たくないか？

「……っ……『月は出ているかと聞いている』………」

「……？……（俺な）」

「………」

「………」

と、俺が突っ込むべきか迷っていたその時、パチパチパチ……と、沙織が拍手で二人を褒め称えた。

「お見事でござるよお二人とも！　いや、拙者の目の前にジャミル様が降臨しました……今、この部屋はまさに、フリーデンのブリッジでした！」

「……？ ああ……今のがそうだったのか……俺はまた、黒猫が壊れたのかと思ったよ。」

「……恥ずかしかったわ……」

「ははは、でもそんな照れなくてもいいのに……つか桐乃は相づちだけか、なんかズル……ってなんでオマエがそんな赤いの！」

「ん……きりりん氏……熱でも？」

「うん、そんなくらい赤いな……流石に気になって桐乃の方をよく見たら、……っ！」

「ってオイ！ それ酒じゃね！？」

「ええ……まさか……ああ……本当でござる」

「まあ……ちよつと……」

「うわ……やべー、あつぶねー……今家に親父がお袋が居たら、二人正座で半日説教……俺はその上に鉄拳二十発は固いぜ……。二人とも留守で助かった……後で、この缶と中身の証拠隠滅しとかなきゃな……。」

「ホラ、お茶を飲みなさい」

「ん……ありがと……」

「これは……リキュール類の発泡カクテルのようですな……炭酸ですし、一見ジュースのようで、間違ったのかと……気づけなくて申し訳ない」

「コンビニの店員も気付けよなあ。」

「いや、買ってきたのは桐乃だし……大丈夫かい」

「ん……大丈夫。そんなに飲んでなかったし」

「缶を持ってみれば、その中身はほとんど残っているらしい。度数も……ビールと変わらないようだ。」

「量的には少ないですから、水を飲んでゆっくりすれば大丈夫かと」

「……」

「……ちよつと待ってて、顔洗ってくる」

「おい、本当に大丈夫なのか？」

「部屋を出た桐乃を追って階段を下りる。思ったよりはふらついて

いないようで、足取りはしっかりしている。

「大丈夫よ、お父さんもお母さんも強いし」

親父は底無しだからなあ……。でもオマエ、まだ中学生だから。

「平気よ、顔洗ったらすっきりしたから」

確かに、さつきと違って顔色も普通だし、声も張りがある。飲んだ量も、冷静になつて考えてみればビール一口分くらいだ。……心配のしすぎだったか。

「分かったよ、しんどかったら言うんだぜ」

桐乃を置いて部屋に戻ると、沙織と黒猫が気まずそうに俺を見上げてきた。

「大丈夫、というかほとんど飲んでなかったしな……。初めて飲んだからだよ……。今はもうピンピンしてた」

「それなら良いのでござるが」

「そう……。良かったわ」

こいつ、桐乃が目の前に居ないと優しいよな……。幸い、桐野はすぐに戻ってきて「ゲーム続けるわよ！」と宣言したので、この間のように空気も壊れることなく、パーティーは続いた。その後、俺が沖田艦長の物真似をさせられたり（これは知っていた）、ドラゴンボールの名台詞を沙織に言わせたり、相変わらぬデコピンや肩たたき、くすぐりなどが続いて……。俺がちよっぴり……。期待……。いや、恐れていたような展開にはならなかった。

「ちなみに、私はあと2回変身を残しています」

沙織、上手すぎだよおまえ……。マジフリーザ様だ。

「……なんだか残念そうね？」

「ばっ……。違いよ！……。なんか、楽しいなって、ひたってた」

「……そう、ならいいわ」

あー、くそ……。こいつらホント人の心読みやがるよな！ ったく、いたいけな男子高校生の内心を読むなよ！ 後悔するぞ！……主に俺が！……。そんな内心の叫びを余所に、罰ゲームばかりが繰り広げられている。もはや王様ゲームじゃないんじゃないか、こ

れ？

「もんどりうつて読めいっ」

「ばかめ」

「龍の印は正義の印！」

「鉄の悪魔を叩いて砕く、キャシャーンがやらねば誰がやる……」

「あーあつて感じ…… ホント、あーあ」

「メーテルううううう！」

「（前略）星が輝く陰で（中略）お呼びとあらば（以下略）」

「おう、八丁堀い」

「深町…… 我が艦は世界最強の原子力潜水艦なのだ……」

「見る！ 人がゴミのようだ」

「クリリンのことかーっっっっ！」

「考えるな、感じる」

「ジョークラッシュだ！」

「これは…… ゴルゴムの仕業だ！」

「あなたの心です」

「俺が正義だ！」

「俺がガンダムだ！」

ガンダムはつかだな沙織。

「いいか、鉄朗にカスリ傷一つつけるな！ 無事に地球へ帰すんだ

！」

「オマエのモノは俺のモノ、俺のモノは俺のモノ」

桐乃、すげー似合うよ。

「ベフォールの子供たちだ……」

「レイイイン！ おまえが欲っすしいいっっっっっっっ！」

「そんな…… 私で良ければ…… ふっつか者ですが……」

言わせたのおまえだよ沙織！ 知らないと言ってる俺に即興で  
台本まで書いて渡して！ 引いてるじゃん二人とも！ 噛んじゃっ  
たし！

「LIKE OR LOVE？」

「そなたの父で……幸せであつたよ」

「唯……オマエは、価値ある選択をした……」

「ぼく、銃、ならない……ぼく、スーパーマン、なる」

「逃げないヤツはよく訓練されたベトコンだ！」

時々、俺が映画の台詞とか注文しても全然いけるとか……。罰ゲ

ームになぜそんなノリノリなんだおまえらっ！

「アブドル・ダムラル・オムニス・ノムニス・ベル・エス・ホリマ

ク 我とともに来たり、我とともに滅ぶべし……」

「俺達は今……太陽と共に戦っている」

「待て、これは孔明の罠だ」

「ひゅ…… ロンダルキアの洞窟の落とし穴の音」

すまん…… やったけど忘れたわ。

「私はイサコ……名付け親はあんただ」

「俺の名だ……地獄に落ちても忘れるな」

「わたしはどんな強い相手もおそれない。同時に、弱い相手もみく

びらない主義です」

「だーれが殺したクックロビンっ」

なんか時々歌とか入っててカオス……というか、半分もわからね

ーよ。オタクこえー。

「ハロー、ハロー。市民、幸福は義務です」

「デコーズ・ワイズメルだよ〜ん」

「ラフィールと呼ぶがいい！」

「堕ちていくわたしいい……」

「宇宙戦艦ヤマトの主題歌を……」

あ、それならいける。

「……非公式4番までフルコーラスで」

知るか！ 桐乃も黒猫も分からんようなネタを俺が分かるか！

おまえだけちよっとおかしいよ！

「かーみーかーぜーのー術ーっ！」

「しあわせだった時もある…… そうでなかった時も……」

「さよなら……みすた〜うらしま……」

「ボールは友達！」

あ、これは知ってる。でも友達蹴るなよな？

「夢は……叶えるためにあるのだから……」

「人間が生きものの生き死にを自由にしようなんて、おこがましいとは思わんかね……」

「Z・E・D」

「早く戦争になーあれ」

「14へ行け」

「……しあわせの一步、手前にいるってことなんだ……」

「ビッグオー！ ショータイム！」

「一枚こぼれることもある」

「いくら人気の絶頂にあらうとも……いつかは落ちる運命にあったのさ」

……もうヤダこいつら……全然わからねえよ……。

「今度の王様は拙者でござるな……では、2番が3番の耳かきをするでござるよ」

お、良い線ついてるなあ……こついうところで空気を読む沙織は流石だぜ。しかも3番俺俺俺俺……っ！ ラッキーっ！

「2番……アタシだけど……3番……誰？」

うそーん、おまえ耳かきできんの？ いや、正確には誰かにしたことあるのか？ もしそんなヤツいたらぶっ飛ばすけどな！

「ん、ないけど多分大丈夫」

「ギブ、沙織、お題」

「ちよっ！ 早っ！」

るせえ！ 俺はまだ死にたくねえ！

「早い！ 早すぎるよスレッガーさん！」

「ふざけるな。俺も医者 endpoint くれだ……命が助かるに越したことはないさ」

「おまえを……殺す」

ぶっそうだな。

「世界の半分をおまえにやろう」

これを知ってるけどいらん。というか……流石に疲れてきたし、喉もかれたぜ……てか途中、クジ引かずにやり合ってたよな？ いけどさ。こんだけやって……タイミングが悪かったり、勝ち負けで狙いを外したり……で、桐乃と黒猫は、お互いにやらせたい役をぶつけられずにいるらしく、なかなか終わろうと言いださない。……てーか俺、そろそろしんどいんですけど……昨日寝てねーし……。

「……っ、やるじゃない」

「……いい加減、諦めたら？ 人間風情がこのクイーン・オブ・ナイトメアに敵うと思ってる？」

なあ……もうそろそろよくね？

「しょ、少々興が乗りすぎましたな……そろそろ終わりにしませんこと？」

お、ちよつと素が出た。

「……分かったわ……次で最後にする……その代わり……きついのいくわよ？」

「どうぞ、地を這う虫さん、お好きに……」

「あ、はは……はは、お二人とも……クールに……ね？ C o o l C o o l C o o l C o o l ! ……でござるよ」

くるくる眼鏡が気になるな。というかタマには外せばいいのに……素顔はすげー美人なんだからさ。

「では……泣いても笑ってもこれが最後の勝負……よござんすね？」  
だからなんでおまえはそんななんだ沙織、今日はもう突っ込む気力残ってねーんだってば。桐乃が、凄い勢いでクジを沙織の手から奪い取り……バキッ！ あ……折れた。ものすごい形相なんだけど……こえー。

「1番がつ！ 王様にキスっ！」

えー……俺達今クジ引いたトコで、まだ見てもいないんだけど……

「……ほ……ほっぺにっ!」

なんか、尻すぼみに小声に……ヘタレたな。というかオマエ、そのクジが王様かどうか確かめてないよね？ だって……俺の手元にあるの

……王様だし……。

……ルールとかどこ行っただよ……

「沙織……」

「な、なんでござるか?」

「いや、そのスマン……手、大丈夫か?」

「ああ、幸いクジが折れたおかげでか、なんともないです……引き抜かれていれば、ささくれが刺さっていたかも知れませんが」

手のひらを広げて見せてくれる……確かにケガはないようだけど……うん、ホント、マジごめん……。

「な、なんなのこの女……わ、私は3番だから、無事よ」

いや、無事とかじゃなくてチョンボだろこれ、誰か突っ込めよ。

……俺は嫌だけど。

「せ、拙者は……」

沙織の手元をのぞき込むと……折れていない割り箸に、マジックで書かれた「2番」の数字が見える。なんかちよつと残念かな……とか思ったり。

……ん?……てことは、残った一本って……

「折れた方がきりりん氏のものでござるから……」

うん

『1番は、きりりんさんでござるな』

へー……というか俺、王様……なんて言える雰囲気じゃないなあ  
……もう、どうでも良いけど……さっさと降参して、テキストに恥  
ずかしい台詞言っちゃえよ……ここまで来たらどんな恥ずかしい台  
詞も平気だぜ……俺なんかもう何でも言えるね！ いやマジで……。  
なんだったらギニュー特戦隊のポーズしちやってもいい！

「なあ……黒猫……」

ま、ちょっとは手加減してやってくれよ……と目で合図しようとした俺の目に飛び込んできたのは……今まで見た黒猫の表情の中で「最も残酷なモノだった」と断言できる……どのくらい怖いかという……。

[illegible]

うん、だって麻奈実の怒った顔怖くねーし……むしろ泣かれる方が怖い……。

まあ、こんくらい。これは……ヤバイ、マジヤバイ、どんくらいヤバイって……あ、もう言ってた？ とにかく真剣なんだって……そんなに負けたくないのかよ……。

「な、俺が代わりにやつからおまえ……」

返事と同時に、頭部をがっちり押さえつけられて、横に捻られ……  
 ……つーか痛えつて！ 首を捻られた俺は………ちようど、黒猫と向き  
 合うような形に………なんか、笑ってますよ黒猫さん！ ……これは  
 これで怖え！ つか………桐乃の息が、俺の首筋にかかっているんだだけ

ど……鼻息やばいよ！　どんだけ負けず嫌いなんだ！　いいかげ……

……　流石に腹を立てた俺が向き直り

「おまえ、いいかげ……！」

ガキッ！

んがぐぐっ！」

「……っ！　んむっ……」

「「「……」」」

えーと……俺は今……何してますか？　おーけい事情を整理しようまず痛覚だ生物としての基本的かつ原始的な感覚だこの進化したモノが触覚と言えるんじゃないかな？　うん歯が痛いなんかぶつけられたおそらく推測ではあるが同等の硬度を持つ物質だ可能性としては歯があげられるあと唇も痛い切ったかも知れないが殴られたような痛みもあるうん親父に殴られたほどじゃない軽症　生存と行動に問題無し損傷軽微機関正常です口腔付近健在頭部はどうか？　両側頭部に圧迫固定感桐乃の両手でがっちりホールドされている……

……ここまで、おそらく約一秒……

びっくりして、思わず目を閉じてしまったが……恐る恐る目を開けると……桐乃の顔、どアップの顔がそこにあって……

……ここまで、多分三秒……

つまり……俺は、桐乃とキスをしていた……現在進行形、I N G  
で。

ここまで五秒

ちなみにきりりんさんは京介君の妹です、それから京介君は俺です。

その事が意識と繋がって認識に至り　その瞬間

「何ってことすんのよつつつつつつつつ」

思いつきり殴り飛ばされた！　しかもグーで！　仁王立ちから足組み替えて腰入れて殴り下ろしたな！　今は洒落になんねーぞ！　　というか……　口をパクパクとさせ、呆然としている俺の前で……　真っ赤になった桐乃が、腰に手を当て……　いきなり表情も変えて、こう叫んだ。

「えゝゝえええと……ね？　……蒼龍・アスカ・ラングレーのマネつつつつ」

えー……　それー……　茫然自失で、何も言えずに居る俺をキツと睨むと……　今度はそのままダッシュで階段を駆け下りていった……。

ええー……　な、何が……　ひょっとして、今の、一発芸で誤魔化したつもり……ですか……。

「……ちょ……だ……大丈夫でござる、か……？　その、今は拙者しかと見ておりましたが、事故でござるよ」

「……はっ！」

お、おう、ようやく立ち直ったぜ……　すまん沙織。黒猫も……　これは流石に……　あう……　なんか、表情読めない……　驚いてはいるよ　うなんだけど……。

部屋を沈黙が覆ってしまったせい……　階下からは、水道の流れる音とガラガラとうがいをしているらしい音がする。……　何気に失礼だよね……　あいつ……。演技の一環……　ですよ？

『うげばえええれるろろ、うえっ！』

な、なんか盛大に吐いてませんか……　さ、流石にドン引きだぜ……　もう失礼とかそういうレベルじゃないよ！

そして……　部屋に残された俺達が何も言えずに固まっていると……

…桐乃が部屋に戻ってきた。

「あーっ！ やっぱり試しにやるもんじゃないわねっ！」

…まだ、続けてたんだ……。

「おお……きりりん氏……流石でござる……」

「え？」

「いや拙者、感服つかまりました……やはり欧米帰りのきりりん氏のネタ、ひと味違いますな！ キスなぞ挨拶の国です！」

「そ、そうかな？」

「身を切つての一発芸……まこと見事、ここは我ら、完敗でござる」

「ま、まあね……これでも、仕事で顔出しもやってるしね！」

「え……え……そ、それでいいの……？ アナタ……『いいの……？』」

うん、黒猫、おまえの言いたいことはよく分かるぞ……だが、ここは沙織ルートが正解だっ！ ……………多分。

「は、はははー、びっくりさせるなよー」

我ながら、見事な棒だ。

「あんたがドジだから………つたく、やっぱ口ニンニク臭いし！」

アナタも同じ臭いです。

「歯磨いて、モンダミン一瓶飲んじやったわよ！」

「えええ……き、きりりんさん……そのう……大丈夫……ですか？」

そこまで俺が嫌い！ 流石にもうマジ泣きしなくなったよ俺！

「うん、やっぱ吐いちゃった。モンダミンミントとか、飲んだら駄目ね」

飲み物じゃないし、用量も危険です……よい子のみんなは……絶対にマネしちゃ駄目だぜ。

「そ……そう、さっきのお酒のせいで戻しているのかと思って……心配したけど……だ、大丈夫みたいね……」

「ごめんねー！ ひよっとしたら、ちよっと酔ってたのかなあ………？」

「かもね……色々」

酒のせいであってくれ！

「ああ……しかし見事な芸でござった。締めに対応しいものでした……そろそろ夕刻ですし、我々もおいとましましょうか、黒猫殿」  
「なんか、すまねえな、沙織……おまえには助けられてばかりだよ。」

「そうね……私も、帰ってみたい番組もあるし、妹達の面倒も見ないと」

「すまないな、たいしたもてなしも出来なくて……ああ、片付けは良いよ、俺がやるからそのままにしておいてくれ」

「それじゃ、お願いするわ……行きましよう、バジーナ」

「……その……またな」

「ええ、それじゃ」

結局、そのまま打ち上げはお開きになったわけだが……二人を玄関先で見送った後……なんとも気まずい……前回よりはだいぶマシだけどな……一応、みんな楽しんでたみたいだし。

「なあ、おい桐乃」

「アンタ」

声をかけるのを見越していたかのように、桐乃が言葉を被せてきた。

「なんだよ」

「鼻血、出てるよ。あと口も切れてる」

「おまえが殴ったんだろうが」

「なんだか……もう怒る気もしてこねえよ。」

「こっち来て」

「なんだよ、また文句か？ 説教か？ 流石に温厚な京介様だって切れる時は切れるんだぜ……。舐められっぱなしじゃないぞ、いい加減にさっきのは……シャレにならんだろう。俺はともかく、おまえのために来てくれた二人に……なんだと思ってるんだよ……。沙織がフオローしてくれなかったら、どうしようもないことになって

たかもしれないのに……。

「そこで待ってて」

俺は、また正座させられてたまるものかと、リビングで立ったまま桐野を待った。いや、俺はやっぱ本気で怒ってるんだぞ！……と主張していたのだが……うまくいかないもので、桐野はすぐに戻ってきた……救急箱を手に持って。

「なんで立ってるの？」

「え……いや別に」

まさか「舐められないように」とも言えず、口ごもってしまう。

「座ってくれないと、手当てできないからソファに座って」

「お……おう」

「……」

「……」

桐乃がアルコールを染みこませた脱脂綿で傷口を拭う間……俺は、黙って桐乃の言うがままにされていた。桐乃も……一言も喋ろうとしない。

やがて、口元の切り傷に小さく切った絆創膏を貼り、丸めた脱脂綿を俺の鼻の穴に突っ込んで、それで手当は終わったらしかった。

あまりにできばきと手を動かすので、少し驚いた。

「うまいもんだな」

「何が」

「ん、手当……化粧の応用か？」

「違うわよ、陸上やってるとね、どうしても切り傷や擦り傷は出来ちゃうから」

ああ、そりゃそうだな……俺も昔、走り回っては怪我をしたもんだ……いつ頃からだったけな？ 怪我するのが怖くて、走らなくなったのって。

「モデルの仕事もあるからね、気は付けてるんだけど……やっぱり痕にならないようにちゃんとしとかないと」

「ふうん……流石だよ。……ありがとうな」

あれ？ 思わずお礼言っちゃったけど、よく考えたら殴ったの桐乃だった……まあいいやもう。

「何よ……キモ……」

素直に言われとけよ……ここは。

「へいへい、やっぱ可愛げがないなオマエって」

「っさいわね……あと、ゴメン」

……ええと……今、俺謝られたよな？ 珍しいこともあるもんだ

……いつ以来だっけ。……いや、今回は謝られて当然か………その当然すら無かった時期に比べると、俺達も歩み寄れたのかねえ。

「もういいよ、それより、明日でいいから二人にも謝つとけよ？

酒のせいにしても良いからさ」

「うん……『もういい』んだね？」

「？ ああ、もう俺のことはいいよ………それより、オマエも唇の所切ってるぞ」

桐乃の唇の端が少し      ほんの少しだけ切れて、薄く血が滲んでいる。

「あ、うん……モンダミンが浸みてちよつと痛い……」

……モンダミン飲むほど厭がられたのはちよつとショックだったけど……確かにイヤかもなあ……。前にちよつと肩に触っただけでもあんなに君持ち悪がってたし。なんか、逆に俺が悪いことしたみたいない気になってきたぜ……。

「絆創膏、貼ってやるうか？」

「いい、自分でやる」

軽い言葉なのに、気まずさを誤魔化そうとしたのを見透かされたような気持ちになる。なんでだろうな……このモヤモヤは？

「私、もう寝るね……明日から合宿で五時出発だから。お父さんとお母さんには晩ご飯いらないって言っておいて」

ああ、毎年この時期だったな……そういや。コミケやらその他の色々で……すっかり忘れちゃってたよ。

「わかった、無理すんなよ。その……明日の朝なら俺は寝てるけど、

合宿頑張れよ」

「……っ、変なの……おやすみ」

「おう、おやすみ」

久しぶりに、柔らかい挨拶を聞いた気がするぜ……こいつとの……まあ「人生相談」以前の冷戦の時でも、挨拶はあったけど……ものすごく義務的なものだったからなあ……ま、お互い様か。挨拶しねーと、親父にどやされるって理由でしてたようなもんだし。

ボタン　と、2階の桐乃の部屋のドアが閉まる音が聞こえてきた。さて、俺も片付けしたら一休みするかねえ……今日は親父もお袋も遅いみたいだし。寝てても文句は言わないだろうよ

8月19日夏　俺のファーストキスは、妹で、鉄の味とニンニク風味だった。

## 第1章 2（後書き）

地味子編と言いつつまだ地味子さんが出せていない……これはきつとゴルゴムの仕業だ！

## 第1章 3（前書き）

打ち上げも無事……とは言えないけれど、まあなんとか収まって、やれやれと思っていたら……赤城のやつが……瀬菜と駆け落ちだ……っ！？

もうどうしようもなく馬鹿な展開にしかくて書いた。  
やっぱり後悔している……でも反省は少しすることにした。

[illegible]

桐乃が合宿に出かけた日の夕方、まあつまり打ち上げの翌日。珍しく赤城のヤツが電話をかけてきた……てか、最近この兄妹から話があるときって、たいていいろいろなこと無いんだよな。

もちろん俺は断った。こういう時、相手に余裕を与えないのが勝利の鍵だぜ……俺はそう学んだのさ！……妹に対する数々の敗北でな！

「ヤダ、どーせろくな事じゃないだろ」

んだよその胡散臭いマルチ臭しかしい話……こちらら貧乏で金に困っちゃいるけどな……犯罪に手を貸す気は無いぜ？……親父怖いしね！

「まあ、話だけでも……」  
「つてか、おまえしか頼れるヤツが居ないんだよ！ 本当に頼む！」

「言うだけいってみるよ、聞いただけ聞いてやる」

「ああ……親父とお袋は旅行だし、うぜー妹は一週間ばかり毎年恒

例の合宿だよ。てかひでーよな？『あんた受験生でしょ？』ってさ  
らっと置いてくんだぜうちの親？」

まあ、仕方ないけどさー。つかこの年になると、両親と旅行つて  
のものなんか照れくさいし。何が「麻奈実ちゃんでも家に呼んでご飯  
作ってもらえばー？」だよ！ しねーよ。それに、家で好き勝手に  
きる機会なんて少ないだけに……ほら、色々とね？

「で、それがどうしたんだよ？」

『ん……言いにくいんだが……瀬菜ちゃんを預かってくれないか？』  
「……は？」

すまん変態ブラコン野郎、もう一度言ってくれ……よく聞こえな  
かった。

『瀬菜ちゃんを……預かってくれないかなあ……と』

「じゃあな……俺これから眼鏡モノDVD見るから切るな、電源も  
切るから」

『待ってくれ！ でないと家電にかけて邪魔するぞ！』

うぜーなあ……つか聞きたくなねえ……はあ……。

「言うだけ言ってみろ、何かあったんだ一体？」

『いや……そのな？ どうしても……一緒にいたくて、2人で暮ら  
すことにしたんだ……』

…… おお ……へ…… 変態でブラコンだとは知  
っていたが……とうとう一線を越えちまいやがったのか…… 引く  
わ…… 引きますわ…… 友達やめてえ…… つか…… ここで電話切ら  
なかった俺は褒められても良いよな？

「あ……アホかおまえ…… 親は何て言ってるんだよ……」  
『言えるわけ無いだろ！』

デスヨネー。

…… ヤバイとはおもってたけどオマエらとうとう……二の句を告  
げずにいると、それを沈黙を了と勘違いしたのか、赤城がポツリと  
つぶやいた。

『もう部屋も用意した……書類はまだだが……』  
ちよ……

『本気なんだ』

そ、そうか……おまえ……すごいよ……友達やめたいくらいな！  
『それで、三日間だけ匿って欲しいんだ、家族にバレたら俺の人生が終わってしまう』

そら終わるわな、ウチだったら勘当モンだよ……しかしなあ……それは困るぞおい……。

『瀬菜のヤツはそれでいいって言ってるのか？』

『いや……その……まだなんだが』

なんじゃそら、お互い納得じゃないのか……？

『営利誘拐なら協力せんぞ？』

『犯罪抜きだっつーの！』

はあ……しかしそれはいくらなんでも無理だよ……赤城……。

『おまえの気持ちは分かったからさ……せめて瀬菜の気持ちを確かめてから……な？』

『何を言ってるんだ高坂？』

いや、おかしいのおまえだから。

『強引すぎるだろ……そういうのって、お互いの気持ちが大事だぜ。まあ、今日はもう寝ろ』

テキストに良いこと言って切っちゃおう、うん。

『それじゃ駄目なんだ！』

『うわ！ 耳元で怒鳴るな！』

ただでさえ声デカいんだよオマエ！

『あ……ああ、すまん。だが……急がないと……売られちゃうんだ  
え、ちよ、あんたん家……なんか変じゃね？ この現代に身売りとか……ありえねーって。』

『う……売られるって！？ 瀬菜が！？』

『いや、正確には買われかねない』

『一緒だよ！ それ匿うとか預かるとか駆け落ちとかそういうレベ



てたんだ！ ああ……何やってるんだよオマエ……。俺……もういや神様、今すぐ十分前に戻してくれ！ こいつからの電話完全無視して着信拒否にすつから！ 今すぐ！ そして永久に！ さらば赤城！

『消費税もいって言うし……』

ますますどうでもいいな！

……いよし、落ち着け俺。ここは……冷静に説得しよう。

「事情は分かった、だがそれは出来ん」

『な……なんでだ！ 親友がこんなに困ってるというのに！』

繰り返すが、果てしなくどうでも良いと思った俺は許されて良いと思う。ネバーエンディングジャンピングマジどうでもいい。

「割とどうでもいい」

『さらりとヒデえ！』

「いや……だつてさあ……エロ本預かってくれとかそういうレベルじゃねえじゃんかよ……流石に真面目に無理だ」

すまん、いくらなんでもちよつと無理だわ。というか……こんな頼みを「任せろよ」って笑顔で笑って聞けるヤツが、日本にどれだけ居るってんだよ。

『くっ……仕方ない……』

「すまんな、他を当たってくれ」

無理だろうけど。

『これだけは使いたくなかつたんだが……』

「んだよ、いくら頼まれても無理なもんは無理だつて」

『……昨日、校舎裏で告白されてたのみんなにバラすからなっ！』

「んなつ……！」

い……イヤな汗が噴き出してきたぜ……

……ど……どこから……だ、誰に……つて決まってるけど！

『ふ……ふふ……出来れば使いたくなかつたよ……こんな卑怯な手段……』

「くっ……せ……瀬菜か……」



うにしか……見えん……。一瞬、色つばいな……とか思っちつた自分を殴りてーよ。

「で、どーすんだよ……つうか、思わず開封しちゃったけどさ……箱に入れたままの方が良かったんじゃない？」

家電扱いで届くとは思わなかったぜ……しかもこれ、配送が個別委託っぽかったな……なんか、配達のおっさんの意味ありげな表情が、もうね……考えないことにしよう……。

「ああ、いや、その……箱のままじゃ可哀相かな……と」

「俺が可哀相だよ……」

泣きてえ。いや……俺は今……泣いていい！

「す、すまん。運び出すときは……ちゃんとまた入ってもらうから」  
擬人化すんな……いや、気持ちちは分かるけどさ……ギョっとするほどリアルだもんなあ……こいつ。

「できればしまったままにして置いて欲しかったが……」

「ベッドはちゃんと明け渡すから」

そうしてくれ、つうかどうしたもんかね……金に目が眩んで、思わず引き受けてしまったが……思った以上にやっかいだなこれは……  
「で、なんでオマエまで泊まる準備してるんだ？」

あたりまえのよーにスポーツバッグからお泊まりセットを取り出す赤城に、ここまでツツコミを耐えた俺は評価されてもいい。

「え、だって瀬菜ちゃん2号とおまえを二人つきりにできないし」

「アホかおまえは！ らぶドールに手を出すか！」

そら……ちよつとは……凄いなー？ とか思っただけど！ 思っただけだし！

「い、いや……すまんその……だが……」

「はあ……もういいよ……俺も、これと夜を1人で過ごすつても嫌だし」

なんとなく後ろ暗くてカーテン締めて作業したんだけど……暗がりで見ると、ホント……死体みたいで怖いよ……なまじっカリアルなぶん……シヤレにならん……。

「す、すまん」

「もういいって……けど、ベッドは俺が寝る……瀬菜は……床だ、おまえは布団で寝ろ」

「せ……瀬菜ちゃん2号が布団で俺が床じゃ駄目か？」

「キモイからやだ」

「容赦ねえ！」

いや、だっておまえ……考えても見ろよ……同じ部屋で友達がらぶドール抱いて寝てるとか、らぶドールが布団に入ってるとか……俺の正常かつ繊細な神経には耐えられん……今だってきついんだぜ……。

「毛布くらいかけといていいからさ、それで妥協してくれ」

「う……わ、分かった」

分かってもらえて何よりだ……出来れば、電話してくる前に理解して欲しかったけどな！ 色々と！ ……そーいや……

「おまえん家つて外泊とかオツケーな方？」

「いや、フツーにうるさいけど、なんかオマエン家遊びに行くって言ったら瀬菜ちゃんが親説得してくれた。やっぱ何だかんだ言って俺のこと愛してるよな瀬菜ちゃん」

……瀬菜のヤツがその行動に走った理由に思い当たる点は山ほどあるが、口にしたくねえ……取りあえず、ヤツの動向は押さえておかないと危険だな……冬コミとかで俺の本が売られてたら泣くよ？ ただでさえどっかのメイドさんに兄妹モノ描かれたというのに……。

「いざと言うときには俺の味方をしてくれて、愛を感じたね！」

良く聞け赤城、おまえの妹さんは不純な動機で君の手助けをしています。きつと今頃部屋で「ウヘヘヘ」とか言いながらキーボード叩いてるよ！！ コミケならまだしも……秋の文化祭あたりで会誌とかに書かれて売られたら、本気で終わるわ……色々。

「なんか……腹減ったな」

そーいや、俺もおまえの電話もらってから飯食ってねーや。気が

ついたらもう8時じゃん……。

「ああ、なんか親いねーつつつたら麻奈実が晩飯届けてくれてたけど、おまえも食うか？」

一緒に食ってけつつたら、なんか用事があるとかで帰っちゃったんだよなあいつ。

「え？ いいの……てかやつぱ付き合い始めたんだな、おまえら……ん？ なんか誤解してるような……。」

「付き合ってないって、何度言わす気だよ」

「え、じゃあ誰に告られたんだよ？ クラスでオマエに告る奴いるはずないし……」

いや、1人くらい居てもよくね？ そら地味だって自覚はあるけど……。

「やつぱオマエ飯抜きな」

「いや！ まて、そういうんじゃないでな……まあ……食いながら話すか」

話すことなんかねーよ。一階に下りて、麻奈実が持ってきてくれたタッパーを次々とレンジに放り込む。ん……揚げ物がべちょべちょにならないようキッチンペーパー入れてくれてるトコとか、アイツらしいな。

「いい匂いだな……田村さん、瀬菜ちゃんの次くらいに良いお嫁さんになるぞ？」

ばっか、あいつより良い嫁になる女なんてそうそう居るわけねーだろ？ 俺が知る限り最高の嫁になる女だぞ？ ……このシスコン

め……、相変わらず目が腐ってやがるな。

「るせーよ、黙って待ってる」

「……なあ……高坂？」

「んだよ」

タッパーの素揚げ野菜を皿に移しつつ適当に返事する。次は……ハンバーグとニンジンか……。

「本当に田村さんじゃないのか……その、告白の相手って」

めんどくせー、超ーめんどくせー……。

「ああ、瀬菜から何も聞いてねーのか？」

「おう、相手までは……校舎裏で抱き合って愛を語ってたとしか聞いてない」

なんか随分誇張してんな！ 嘘じゃないけど！ まあ……それ以上余計なことは喋ってないみたいで何よりだ。

「ちげーよ、ついでに言うともまだ返事もしてねえ」

「ふうん……そうか……」

お、この匂いは……チーズ入りだな……俺好きなんだよなあこれ、付け合わせのニンジンは……嫌いだけど、あいつの味付けしたグラッセだけは俺も食えるし。甘さ控えめで箸休めにも良いんだよな。

「ほら、食えよ」

炊飯器からご飯をよそって渡してやる……（飯だけはうちで炊いた）。何か不満そうだな、赤城。

「なあ……高坂……」

「文句があるなら食うな」

「いや、なぜ俺にはハンバーグがないんだ？ 2個あるんだから、1個くらいくれても良くね？」

るせーよ、俺の好物なんだからいーだろ。食わせてやってるだけでも有り難く思え。

「仕方ねえな……ほれ」

戸棚から買い置き of 缶詰と缶切りを渡してやる……それでいーだろ。

「ほんとと分かりやすいな、おまえ」

何呆れてんだ……。んだよ、何が言いたいかさっぱり分からん。

「瀬菜にチクられなくなかったら文句言うなよ」

「へいへい……っと、これ缶切りいらないぞ」

「あつそ、なんかそれも美味そうだな？」

「おい！ てめーは田村さんの作ってくれたハンバーグがあるだろうが！」

「んだよ……ケチだな」

「オマエに言われたくねえよ!？」

金取らねーだけ有り難く思え。

「もういいからとつと食つてとつと寝ようぜ……」

「ったく……お、この味噌汁すげー美味いな!？　なんだこれ？」

ん？　ああ、これは美味しいぞ。具は豆腐とタマネギとワカメ……  
出汁は煮干しと昆布だけでなんの変哲もないけどな……ちゃん和一匹一匹ワタと頭取って、軽く炒ってから半日水に漬けて、それからゆつくり煮出すんだ……最後に甘口の味噌で仕上げて……田村家の味ってヤツだな。俺も手伝ったことあるけど、めんどくせーんだぜ？

しかし……最近、ますます料理が上手くなったなあ……麻奈実、おばあちゃんの作る味噌汁に追い付いたわ……。ちつ……味噌汁も分けてやるんじゃないかな……。

「ふいー……美味かったー!　ごっそさん!」

「おう」

「洗い物くらい手伝うかな……流しは？」

「いーよ、そのまま……明日まとめてやつから」

親父が居たら絶対許されないけどな、たまにはグータラさせろつて。

「そーか」

「ああ……しかも今日は疲れたよ……とつと寝ようぜ……」

「まだ9時前なのにか？」

うるせー、こちとら昨日の寝不足がまだたたってるんだ……色々あつたんだよ。

「じゃ……じゃあさ？　その……こないだ一緒に金出して買ったDVDあつたろ？　あれ、見てて良い？」

「駄目だ」

いいわけあるかああ！　あれは俺んだ……てか人んちで何しようってんだオマエ！　なんかこう、ストッブ安を突き抜けてどうしよ

うもないクズになりつつあるぞ！………たく……俺の周りつてのはどうしてこう………残念なイケメンとか残念な美人しかないのかね……。

「はは、そういうと思ったよ」

何笑ってるんだよ、イラつときたぞ。

「俺のだからな」

「はいはい……おい、なんか携帯鳴ってんぞ」

テーブルの上で、マナーモードにしたままだった携帯がブルブル震えている……麻奈実か？　どーせ「ご飯食べた？」とかって褒めてもらいたいんだろうよ……やれやれ……。携帯を手に廊下へ出てフリップを開く……と、ん？　これはっ！

「よ……よう？　どうした？」

フツ……ちよつとイケメン声、がつつかずに5コール目………完璧だな俺。

「……？　な、なんかキモいですね……お兄さん」

挨拶も無しにそれって酷くね！？　マイラブリーエンジェルあやせたん……。

「いや、いつも通り普通だが……何か用か？」

「……いや、おかしかったぞオマエ……さては例の女か？」

るせえ！　っか台所に居ろ！　こっち来んな残念イケメンシスコン！

赤城に軽く蹴りをくれて台所へ追い払う。

「どうかしましたか？　私、急いでるんですけど……」

かけてきたのオマエだよね！　残念美人エンジェル！

「い、いや……何でもない。どうかしたのか？　こないだのプロポーズ、受ける気になってくれたの？　今ならまだ間に合うんだけど………具体的にはあと一週間以内くらいなら」

「安心して下さい、一週間どころか人生終わって生まれ変わってもありませんから。そんなことどうでもいいんですが、桐乃のこと………」

相変わらず容赦ないよね……。まあいいや、そくだよね……。

「アイツがどうかしたのか？」

「いえ、何やら風邪を引いたと聞いて……。携帯も繋がらないし……」

……。それを誰から聞いたのか聞けなかった俺、普通だよな？ あやせさんマジパねえっす。

「ふーん、昨日はそんな様子無かったけどなあ……」

モンダミンの一気飲みとかバカな事をやらかしていたことは、あいつのイメージのために黙っていてやるか……。優しくなったよな……俺。

「そうですか……。合宿初日からなので、ちよつと心配で」

「何かあったら連絡あるだろうし、風邪だろ？ この前みたいにインフルエンザって訳じゃないなら、心配するなよ」

「そうですね」

「ああ、何かあったら連絡するよ」

やっぱ、コイツも良い奴だよな……。桐乃のことをこれだけ心配してるんだし……。時々、ちよつと怖いけど。……。あ、そーだちよつといいや。

「分かりました……。それじゃ」

「あ、ちよつと待ってくれよ」

「何ですか」

……。何か、いきなり不機嫌なんですけど……。何その「もういいでしょ、邪魔！」みたいな口調……。さっきと違いすぎだろ！ だけど俺はくじけないね！

「い、いや……。そのな？ たとえば……。なんだが俺の友達が、とある女の子から告白されて……。だな」

「へえー」

心底どうでもいいのね……。心が折れそくだよママン……。ちよつとくらい嫉妬とかしてくれても良くね？

「ま、まあ待て……。その、そいつも憎からず相手を憎からず思っていて……。だけど、ちよつと想定外だったというか、わりと急に告ら

れて戸惑ってる……らしいんだが、どうしたらいいかな……って」

「……」

あ、あの……黙られると怖いですあやせさん……。

「それで、その相手とはどんな関係なんですか」

「いや、まあ……割と仲良くはしてて、一緒に学校から帰ったり遊びに行ったり、買い物行ったりとかかな」

「何も悩むこと無いじゃないですか……良かった、ちゃんと役に立ってたみたい」

何が？

「ん？ いや友達の話だけだな」

「……それでいいです。で、好きなんですよ……その人のこと？ あまり難しく考えなくてもいいと思いますよ」

好きか嫌いかで言えばかなり好きだな。女性として……うん、最近すげー色々こー……からかわれてたと思ってた部分まで含めると、正直ドキドキするし。

「そか……そうだな」

「ええ、そうです。ちよつとホツとしました……無駄にならなくて何よりです……良かったですね……お兄さん」

俺じゃないって！ ……俺だけだな。

「じゃあ……麻奈実お姉さんとお幸せに」

……ん……え……？

「おいこらあやせ……おまえ……何か勘違いしてないか？」

「え、ああ……『お友達の話』という設定でした……失礼しました。野暮なことを言うのもアレですし、これで」

いやいやいやいやいやいや！ 違っって！

「ちよ、ちよつと待てあやせ！ 違っ！ それは違っ！」

「な……何が違うんですか？ うまくいったんでしょう？ いいじゃないですかもう……」

「そこで何で麻奈実が出るんだよ！ 違えーって！」

「……え……」

あれ……？　なんか……さらにトーンが低いよ……温度も……ぜ  
……絶対零度ってヤツ？　加奈子が怯えていたプレッシャーはこれ  
かっ！

「何ですって……」

「い、いや、だからな？　麻奈実とか関係なく……その、友達の話  
……告白したのは全然別の女で、その……」

「好きにすればいいと思いますよ、好きな人に好きと言えば良いだ  
けです。それじゃ」

ブッ

……切られた！……な……なんかかつお、おお怒ってた……そ、  
それも……マジで？　なんでだよ……ワケわかんねー……。

……嫉妬……？　……うん、ねーな。

「おう、高坂ー、電話終わったか？」

あ、すまん。オマエの事完全に忘れてたわ。

「何か失礼なこと考えてそうな顔だよな……」

「いや、いるの忘れてた」

「黙っていてくれよそういう本音は！」

「すまん」

「ったく……あ、洗い物しといたぜ。手が空いたし」

あー、すまん……助かる。

「ああ、助かる……けど、なんか疲れたから悪いけど俺もう寝るわ

……」

「おう、シャワーだけ貸してくれや……トイレの向こう？」

「あっちだ、先に寝てるから勝手に使え」

風呂場の方を指さして、階段の1段目に足をかけたところで肩を  
つかまれ、真剣な顔で赤城がこう言った。

「俺が風呂に入っている間、瀬菜に何もするなよ？」

「するか！」

もうやだこの兄妹……。俺は部屋に戻ると瀬菜2号に毛布を被せてベッドの脇に下ろし、客用の布団をその向こうに敷いた。

うーん……。なんとも言えない光景……。惨状だな……。つか俺の部屋狭いな。

物が無い割に……。桐乃の部屋の方が広いし……。昔、麻奈実とかが泊まりに来たときは、あっちの部屋を使ってたんだよ……。確か。あの頃は赤ちゃんもまだ居て……。3人で寝たりしたっけ……。

そんな事を考えているうちに、一昨日からの疲れが襲ってきて、あつという間に眠っちまったよ……。疲れてたんだろうな……。俺。

それから、さほど時間は経たなかったと思う。ほんの……。ドアが開く音がして頬をぺちんと叩かれた。なんだよ……。赤城……。っせーな、っせーかくウトウトしてたたってのに。

「るせーよ、とつとと寝ろ」

「ちよ……。兄貴……」

……。ん？　なんか……。のしかかって……

バツ！　電光石火だったね！　今の俺の動き！　どれくらいってそりゃもう、暗殺者に襲われた戦国武将が助かったちゃうレベル！　瀬

……。瀬菜の言った事が現実になっちまうとこだっ……。た……。ぜ！

慌てて電気をつけると……。あれ……。赤城……。縮んだ？

いや、それはねーっつーか……。目が慣れたら……。なんか、桐乃が

……。なんでいるのおまえ？

「なっ……。何すんのよ！」

いやそれこっちのセリフ、てかおまえ合宿じゃなかったのかよ！

「いや、っーかおまえ何やってんの？」

兄の寝込みを襲ってビンタとかすんなよな！

「ん……。どした……。高坂……」

あ、そーいやコレもいた。

「え……。ええええええ！？　だ……。誰っ！　なんで！？」

いや桐乃驚きすぎ、そんなビックリせんでも……。

「あ、すまん。俺の友達　今日は遊びに来てただけ」

はあ 瀬菜歡喜な展開でなくて良かったぜ……だが……警戒はしておかないとな……明日はコイツ、物置に寝かせよう。

「あ、赤城っていいいます、その、高坂君とは同じクラスで」

「あ、ああ、はい、そのいつも兄がお世話になっています」

どしたのオマエ、変だよ？

「……し、失礼しました」

「いや、合宿は？ なんか風邪引いたんだって……大丈夫か？」

「……？ ああ！ そ、そうなの！ それでちよつと大事を取って明後日からの参加にしたの！」

ふうん……まあ、ああいうのって、雑魚寝だしな。風邪がうつるとマズいだろうし。

「ご、ごめ……ん……ね」

知らない人間が居るからか口調が丁寧だな。そーいや、こいつ麻奈実以外には割と普通なんだよな……よほどウマが合わないのかねえ。つか、何かたまってたきり……き……きやー……あ、あんたの足下ー 桐乃の目線……ベッドのすぐ傍……忘れてたー……

………終わった。

「きゅわ……ひっ……えう……」

あ………なんか、叫ぶ余裕なさそ……

「きやー………っ！」

やっぱ叫んだっ！ やべえ！

俺はとっさに桐乃を抱きかかえー……以前、あやせと相對したときのように口を塞いだ。

「んむむむー！」

うわあっ！　どんな絵面だよこれっ！　夜の部屋で……男が二人……半裸の死体と……ショートパンツにＴシャツの女子中学生を押さえつけて口を塞いでるって……お……終わってる……どう見たってコレ、犯罪臭しかしねえ！

「いでえ！」

マジ噛みされたっ！　痛いって！　シャレにならん！　し……しかも……なんか……これ、マジ泣き……してる……。と、とにかくなんとかしなければ……。

「いいか、桐乃。よく聞け……これは怪しい事をしていたワケじゃない」

「んもむけーっ！」

うん、そう言いたいのは分かる、俺だってコレを見たら問答無用で通報する。……だが、とりあえずはなんとかこの場を収めねば……！　俺は必死で妹を押さえつけたまま、十分近くかかってようやく事情を半分ほど説明し……なんとか、桐乃を落ち着かせることに……失敗した。

静かにはなっただが……（その頃には俺の手のひらはズタズタになっていた。かなり痛い）

「う……ひつく……う、うう……あうっ、ひん……ずずっ」

す……座り込んでしゃくり上げ始めたとは……これは予想外……いや……無理もないつか……ね……自分の兄がらぶドルと男部屋に連れ込んで……しかも、自分は口を塞がれ……さすがにこいつも泣きたくなるよな……。こ……こんなにダメージを受けている桐乃を見るのは初めてかもしれない……。

「す……すまん高坂……その……」

あー……全部オマエのせいだが、もうこの際それはどうでもいいや……。

「き、桐乃……落ち着け……な？」

俯いて、ブルブルと震えている……こっこれは……やっぱ……キ

レてるよなあ……うん……エロサイト巡りがバレた時以上だ……間違いない……。

「死んで償え」

「それは勘弁して！」

ああ……本気だよこの目……絶対許さないって目だ……。

「とりあえずお父さんに連絡……いや……それは勘弁してあげるけど……許せないから、今すぐ家から出て行って」

鼻水とか、涙とかで化粧が落ちてぐっちょぐちゃだよ……怖いけど……これ、俺達が悪いよな……明らかに……。

「とりあえず……事情を説明して、それからゆっくり殺すから」

それから30分、俺達は正座したまま女子中学生のお説教に、言い訳をする羽目になってしまった……なんてことだ……。

「……で？ 申し開きはそれで終わり？」

結局、赤城の方は桐乃の扱いがよく分かっていないのもあって……大半の事情を俺が説明したわけだが……まだ、桐乃は怒りが冷めないらしく……俺達は足を崩すことすら許されずにいた。

「そ……その、何度も言ったが……これには事情が」

「ダツチ イフ連れ込むような変態は喋るな、だが説明はしろ」

……うう……もう駄目だ……

「とりあえず、今すぐ捨ててきて、言い訳は認めない。あとアンタ、しばらく帰ってこないでどっか行って、公園で寝ろ」

にべもねえ……。そろそろ諦めて、しばらく麻奈実んちにでも逃げるかな……と諦めかけていたとき、赤城が突然涙を流しながら桐乃にワビを入れ始めた。

「こっ……今回のことは……全部俺のせいなんだ……高坂は……悪くない」

うん俺もそう思う。

「だ……だけど……瀬菜は……瀬菜ちゃんだけはなんとかしてくれ……捨てるのだけは……許してくれ……」

「聞きたくありません、事情も何も……こんな」

「いやっ聞いてくれ、その……」

言葉につまり、嗚咽する赤城……。これが本当に妹のためなら格好良いのになあ……。ギャグにしてもタチ悪いわ。

「というか『瀬菜ちゃん』ってなんですか？ 名前まで付けておかしいとか」

ええ それオマエが言っちゃう……？

「……」

「ああ……その……だな、こいつの妹の名前なんだ……」

ちよつとだけ赤城が可哀相になって、間に入ってフォロー……。になるのか怪しい弁護を試みる。

「え？ ……妹って……ひょつとして……生き別れの妹さんや、病死したとか……？」

「ただエロゲ脳なんだオマエ！ ちよつとおかしいよ！」

「い、いや……その、瀬菜は生きてるけどな。黒猫の……同級生で、ゲーム研究会の仲間だ」

「瀬菜ちゃんって……ひょつとして……コミケの時の……せなちー、だよな……言われてみれば……確かに似てるけど、それが……なんの関係があるのよ」

「その……」

「いいよ高坂、俺が話す」

……男前な顔とセリフだけど、土台からおかしいからな？ まあそれはともかく……それからほぼ1時間……赤城がいかに妹を愛しているか……など……について……熱く語っていたわけで……最後の方はもう、俺聞いてなかったけど……足、痺れて痛いし……。

「だから……どうしても……妹にそっくりな人形が誰かの慰み者になるなんて許せなくて……」

「ふ……ふうん……そう……なんだ……」

「高坂に迷惑をかけるとは分かっていたが……部屋が空く明後日まで……と思って」

「部屋まで借りたの!？」

そんなびっくりすんなよ……俺も驚いたけどさ……らぶドル購入よりはびっくりしなかったよ、うん。

「よ……よく借りられましたね……保証人とかは？」

「え？」

「……？」

「……」

あ……そーいや、俺ら18歳だけど……こういうのって、多分保証人とかいるよね？」

「け……契約書……まだ、読んでない……仮押さえてことで……決めてきたけど……」

それから5分後。

「無理みたいですネ」

「な……なんてこった……!」

いや赤城、最初に気付いとけよ……舞い上がってたんだろうけどさ……。

「はあ……もういいです。とにかく……!」

「は、はい」

「捨てるとは言わないから、明日中にどうにかしてよね? こんな変態兄貴が家にいるなんて知られたら、アタシあんたの事本気で殺すから」

怖え……。

「赤城さん……でした?」

「は、はいっ!」

「事情は分かりました。でも、やはり受け入れられないものは受け入れられません。分かっていただけと有り難いです」

「すみません……」

あれ、なんかコイツおかしくね? 俺だったら半殺しだよ。てーか流石に今回はされても仕方ないつか……さっきなんか本気で震えてたし。

やっぱあれか？ イケメンだからか？ コイツ、御鏡みたいなのは違うタイプだけど……くそう、腹が立つな……。

「アタシ、風邪気味だからもう寝る。私が起きて次に来たとき、まだここにそれがあつたら、今度は本当にお父さんに電話するから」というか、何おまえ携帯とかで写メ撮ってんの？

「え……現場写真？」

現場言うな！

「まあいいわ、何かあつたら、これバラ撒くから……分かってるわね？」

くっ……仕方ない……。

「おう……分かった」

「た……助かります……」

うーん……女子中学生にマジ泣き説教とか食らっちゃったよ……もう、俺らの尊厳とか、ゴミだな……。

「じゃあ、そういうことで」

そう言い残して、桐乃はドアを閉めて出て行った。勢いからして……どうやら少し落ち着いてくれたらしいが……なんとも後味の悪いことになってしまった……どうしたらいいんだよ……。

「すまん……」

何度目か分からない赤城の謝罪……もう聞く方も疲れた。

「いいよもう……とりあえず、寝ようぜ……明日、朝一で考えよう……」

気がつけば、既に日付が変わっていた。もう、何もかもどうでもいいや……。

「なあ……高坂」

「んだよ……寝ろって言つたら」

時計を見れば、1時を少し回っていた。疲れてはいたが……目がさえて眠れない、きつとコイツもそうなんだろう。

「田村さんのことなんだ……」

んだよ……まさかとは思っていたけどコイツ本気でちょっかいかけるとか言うんじゃないだろうな？

「まさかと思うが、好きだとか言うんじゃないだろうな？　だとしたら俺は、今日のこののをアイツに話さねばならんが」

俺も大ダメージだが、知ったことか。

「そうじゃねえよ……そら、ちょっとはいいなんて思ったこともあったよ、カワイイし……胸も瀬菜ちゃんほどじゃないけどデカイし」「どこ見てんだよぶっ飛ばすぞ！」

はっ……いかん、つい熱くなってしまった、あいつは俺の家族みたいなモノなんだよ、桐乃と同じな、だから……誰にもやれねえんだよ。

「けどな……オマエと一緒にいる田村さんを見てるとな……あの笑顔を見てると……なんていうか……こう、そんな事考えられなくなるんだよ」

「……」

「クラスの連中も、多分一緒だと思うぜ……田村さん、結構人気あったんだけどな、もう誰もそんなこと言わなくなったよ」

そんなにたくさんさんの隠れファンタスティックが棲息していたことが驚きだ。

「んでだよ」

まさか、俺と付き合ってるから邪魔しちや悪いとかか？

「おまえが思ってるのとも、多分違うよ……そうだな……『そこに居るのが、並んでるのが』正しいつつかな……すまん、うまく言えんわ」

じゃあ黙れ、そしてもう寝ろ。

「まあ、おまえが決めることだったな、すまん。もう言わないよ」

「……最初っから黙ってるよ……」

「ははっ……悪かった」

けっ……俺は、自分が思うとおりにするさ……ちゃんと、な。

俺は誰にも縛られていないし、自分で選ぶ　そう決めたんだ。  
好きな子がいて……俺を好きな子がいる。　他に何がいるっ  
うんだ？

布団の中で俺は　アドレス帳からアイツのメアドを選び  
……普段よりちょっとだけ長いメールを打つことにした。

## 第1章 3（後書き）

まだ今日も出てこなかったけど！ やつと書けた！  
次は全部地味子とロツクだ！ ひゃっほーい！！

うん、反省なんかしない。だって地味子愛してるから。

## 第2章 1（前書き）

イヤッホオオオオオオウッ！ 地味子が書ける！ やつと出せ  
た！

ばんじゃーい！

もう悔いはない。

## 第2章 1

「お昼、またお素麺だけかい？」

「おう」

昨日の騒動から一日明け、俺はいつもの様に田村家で麻奈実と勉強を終え、居間の畳でのんびりとくつろぎながら素麺を茹でる麻奈実のことをぼーっと眺めている……。しかし我ながらこの勉強会、よく続くもんだな……。ここ数日の色々もあってちよつと疲れ気味だが……。この時期にサボって、せつかく勝ち取ったA判定も落としたくないというもあるが。

「ごめんね、お素麺ばかり続いちゃって……」

「いーよ、疲れてるからあんまこつてりしたモン食いたくねーし」

「え……？　じゃあ……。昨日は、ハンバーグよりもちらし寿司の方が良かったかな……。迷ったんだけど」

「ん？　いやいや、晩飯はガッツリ食いたいからちよつと良かった。あれ美味かったし」

「そ……。そう？　良かった」

そんなにうるたえるなよ、昼間は暑いからどーしても食が細るだけだつて。それに、おまえの作るもんは何だつて美味いぞ……。何より、ちよつとただけだけど、俺の好みに合わせてるだろ？　田村家の味と微妙に違つてたりするもんな。

「赤城君がお泊まりしてたんだっけ？」

「おう、ひでー目に遭つた。おかげでまた桐乃と喧嘩しちまった」

……。今朝は……。流石に部屋から出てこなかったし……。風邪のことはちと気になったけど、昨日の様子じゃ、さほど心配なさそうだしな。

「そうなんだ……。桐乃ちゃん、お年頃だし難しいよね」

「あいつの場合、年頃以前の問題だと思う」

喧嘩の原因が……。らぶドルを匿っていて桐乃に見つかったせい

だとは流石に言いづらいな。ちなみに……瀬菜2号は翌朝、開店前だというのに、電話を受けたお店がすぐ回収に来てくれた。家族に見つかって返品という事はまああるそうで細かいことは何も言わず、キャンセル料すら取らずに回収してくれた。なんというか……あの侠気溢れる店長が格好良く思えてしまったのはナイショである。

そして、ドナドナされてゆく瀬菜2号の乗ったトラックを見送る赤城は……これ以上ないほどに格好悪かった……号泣してるし……もう、株価で言う……ちり紙交換クラスの価格と言っても良いレベル。

つか、何も昨日無理して持つて帰ること無かったよね？ なんて気付いても後の祭りだ。

「あはは、でもこないだはすごおしく仲よさそうにしてたよね」  
「……ああ……まあなあ」

結局、大雑把に桐乃とのデートの事情を説明したのだが、こいつがどこまで理解しているかはちょっと怪しいな……と言っても、言い訳を重ねても嘘くさくなるだけだし、悪いように解釈をするようなやつじゃないから心配はしていないが。

「あやせちゃんからも話は聞いたしね」  
「ふうん……ホント仲良くなったのな、おまえら」

俺なんかあいつに、どーでもいいと思われてるとしか思えないぞ……ちよつと妬けるな。

「きょうちゃんのおかげ……かな？」

「ん？ まあ紹介したのは俺だっけな」

「ううん……それだけじゃないけどね」

んだよ、最近こいつ何かともったいぶるよな……幼馴染みに秘密なんか作れると思うなよ？ ……ちよつとからかってやるか……。

「ところで、おまえ女に目覚めたの？」

ガシャン！

「……ええっ！ ななななにをいってるのきょうちゃんっ！？」  
いやそんな、お玉を落とすほどビックリしなくても……。しか

し、こいつの驚き顔と困り顔は、ホント癒されるわ。

「ん、いやなー？ おまえの部屋の鏡台に見慣れない化粧品があったからさー」

「ええっ！？ 出しっぱなしだった？ わたし！？」

「なんか知らんけど高そうだなーって思った」

「隠してるつもりだったのか、相変わらずどっか抜けてるな。」

「なんだあゝ……そゆこと……」

何だと思ったんだこいつは。

「ああいうのって高いんだろ？ おまえ、こないだまで化粧水くらいしか使ってなかったじゃん」

「むー…… 冬はリップクリームだって塗ってたもん」

それ……化粧品か？ なんかうちの妹様と随分差を感じるぜ……。

「いやどしたのかなー、ってね？」

「えと……ええとね？ あ、あやせちゃんが『試供品でもらったんで良かったら』ってくれたんだけど……」

ああ、なるほどね。そういや桐乃もよく化粧品をオフクロに渡したりしてるな……仕事絡みで貰ったり買ったりで余るんだろ……。あれは親父から庇って貰う代わりの貢ぎ物ってトコロかな。

「はは、でも使い方が分からなかったとかそんなところだろ」

「あ……うん、そ、そうっ！ そうなんだゝ……も、もったいなくて使えなくて……」

だよなあ……おまえの顔、どう見てもすっぴんだもん。うちの妹なんか化粧したら……あれ？ 最近あいつのすっぴん見たっけ？

……まあいいや、身内の顔なんかいちいち意識してねーし。

「おまえはそのままでもいいよ」

「え……そうかな？」

分かりやすく上機嫌になる麻奈実。トントントン……とキュウリを刻む音がリズムカルに響く。……うん、よかった……またうっかりあやせと比較して……俺が困るところだった。

「おう、そのままの普通が一番だって」

「えへへ……あ、固めでいいんだよね？」

「ん」

今日はちよつとお腹に優しくフツの茹で加減でも良いけど……ま、どっちでもいいや。

「ちよつと待っててね、すぐ持っていくから」

「おう」

ぐでーつと横になったまま、テレビから流れるお昼のニュースなんかを眺めていたら、麻奈実が大きなお盆に載せたガラス鉢を運んできた。

「もーっ、また姿勢悪くしてテレビ見てる。目が悪くなっちゃうよ？」

いや、おまえの方が目悪いじゃん。ていうか小言がー々おばあちゃんだよなあ。

「へいへい……っくらせつと」

「はい……どうぞっ」

「おっ、いいね……これを見ると夏って感じるよ」

「大袈裟だな、きょうちゃん。こないだもお素麺作ったじゃない」  
そうだけども、ウチのオフクロの料理……何度も引き合いに出してアレだけども、親父が昼間いないのを良いことに、素麺一週間とが続けて出すんだぜ……容赦なく。……あと、市販のめんつゆは良いとしても、フルーツの缶詰を「シロップごと」入れたこともあるし……食ったけど……。

「まあ、そうなんだけどね」

出されたのは、なんてことのないごく普通のお素麺で、ガラスの大鉢に氷、キュウリ、薄焼きタマゴ、それにピンクがかったハムがそれぞれ綺麗に千切りに盛りつけられている。何より、真ん中の彩りがプチトマトというのが素晴らしい……料理に果物を入れる文化はこの世から滅ばいい！……と思っている俺にはこれが一番嬉しい。

「ただいまー！ メシー！」

さて、いただきますか……と箸を手にしたところで、聞き慣れたデカ声が玄関から聞こえてきた。

「ロック……うるせえ」

「おっ！ あんちゃん来てたんだー」

「悪いかよ」

「んにゃ、後でさあー、俺の三味線聞いてくんね？ 新曲マスターしたんだぜ！」

「悪いが、午後は用事がある」

「冷たっ！ あんちゃん高校上がってから薄情になったよなっ！？」

おめーの平家物語聞いてたら夜になっちまうしな……ロックと掛け合いをやっていると、ついつい小学生の頃みたいな気分になって、どうにも悪ノリが止まらなくなるのが俺の悪い癖だ。

「大人は忙しいんだよ……とっとと着替えて来いよ」

「えー、めんどくさいー。ねーちゃん俺もメシー」

「駄目だよ、着替えてこないと食べさせないからねー？」

「ちえっ……分かったよ」

そんなに怒った様子もなく、階段をドタドタと上がっていくロック。あの急角度をよくもまあ転ばないもんだ。

「も……ロックつてば」

「相変わらずガキだな……さて、いただきます」

「はいっ、どうぞ！」

ご機嫌だなあ……こいつ。桐乃みたいに始終仏頂面なのがいるウチよりも、こっちの方が落ち着く気持ち、分かるだろ？

素麺を一箸取ってつゆにつけてすすると、濃厚な出汁の風味が心地よく口に広がった。

「お……今日のは味が違うな？」

「分かる？ エビの殻と頭にシイタケ、あと昆布で取ってみたんだ。初めて試したんだけど……ど、どうかなっ？」

ちよっただけ不安そうに上目遣いの麻奈実……なるほど、それでコイツ自分も食べずに待ってたのか。

「美味しいぞ、いつものカツオ出汁……あれも美味しいけど、たまには違うのもいいな」

これは本当に美味しい、臭みの出がちなエビの出汁を、椎茸と昆布がうまくまとめてまるやかに感じさせる。それでいてしつこくない味付けというのは流石という他はない。

「よかつた、ちょーつと不安だったんだ……あ、おしよがい  
る？」

「お」

それを忘れてた……チューブを受け取り、うにと絞り出す……  
この気取らなさも俺好みだ。

「も、またそんなに入れてる」

許せ、たとえおまえの手料理でも、これだけは譲れん。

「しょうがないなあ……きょうちゃんは」

「うるせー……ん？ 麻奈実、おまえの何それ？」

見ると、麻奈実の手元には大鉢とは別のガラス鉢が置かれていて……何やら透明なものが泳いでいる。……ひよつとして？

「え……うん、その葛切り……昨日たくさん作りすぎちゃって……」

ああ……でもそれ、合うの？

「ふーん」

ずるずる、と素麺をすすりながら麻奈実の方を見ていると……う

ん……何か……。

「きょうちゃんも午後、用事あるんだ……」

あるよ。

「わ、私もね！ きよ、今日はあやせちゃんと出かけるんだ！」

「へー……どこ行くの？」

「へへー……ひみつー。あ、駄目だよ？ そんな顔しても連れて  
つてあげないんだから」

「何も言ってねー」  
ずるずる。

「ふふ……あやせちゃんから聞いたよ？ またせくはらしたんで

しゅー！ 怒るよ？ あやせちゃんが『しばらくかけてこないください』って言ってたよ」

わー……麻奈実フィルター越しだと全然怖くねえ……。つか何に怒ってるんだあいつ？

「へいへい」

「言う事聞かないとお母さんに話しちゃうよ？」

「それは勘弁してっ！？」

こ……こいつ……変なワザ覚えやがって……畜生……。

「ねーちゃん！ 俺のー！」

るせえなコイツ、俺に立ち上がる無敵時間を超越せや。

「自分で入れてよ」

文句を言いつつも、台所へ向かう麻奈実。んー……？ こいつ、腰回りが……こう、ちよつと痩せたかな？

「あんちゃん、しばらく来なかつたじゃん。元気だった？」

「お盆周りは忙しくてな……おまえとこだって法事のお菓子やらで忙しかったろ」

「うん、じつちゃん達も今日は店の手伝い行ってる」

毎年、この時期になると法事やら何やらで注文が増えるらしく、田村屋は繁盛するのだ。

「今年は手伝えなくて悪かったな」

「いいよ、桐乃ちゃん達のお手伝いだったんでしょ？」

「お……おう、まあな」

まさか、夏コミの原稿を作っていました！ とも言にくい……。てかロツク、めんつゆ飛ばすな。

「あ！ そーだあんちゃん！」

「んだよ、食うか喋るかどっちかにしろ」

突然、思いだしたようにロツクが話しかけてきた。

「きりん……あんちゃんの妹！」

「……桐乃がどうしたんだよ」

いかん……なんか俺、最近あいつの名前を人の口……ことに野郎

から聞くだけで嫌な気分になるな……。これも全部あの御鏡のせいだ、うん、絶対間違いない。

「なんでいきなり嫌そうな面なんだよー」

「もともとだ」

「駄目だよ、ロック。きょうちゃんはね、”しすこん”なんだから、無理言ったら……」

「何を言つとるかおまえっ！」

「いつもこいつも……全く……」。

「え、だってあやせちゃんからもそう聞いたよ？ こないだだって」

断じて違うの！ もう泣くよ俺！ 最後のオアシスが崩壊したら！

「え……そうなの？」

貴様も真に受けて引くなロック！ やっぱおまえパロスペシャルとキヤメルクラッチフルコースな！？

「違うわアホ！ ……ったく」

「えー、だって俺ねーちゃんとデートとかしねーよ」

もう……言っても無駄だな、コイツら。

「どーでもいいわ……で、何だよ」

「紹介してくれよ！ 駄目なら携帯のメアドだけでもいいからさ！」

「訴えを棄却する」

「せめて審議してっ！？」

中坊のクセによく知ってたな。

「駄目なもんは駄目だ。だいたいあいつがおまえなんか相手するわけ無いだろ」

「え……そうかなあ……？」

「おう、そもそも……そのマルコメで何しようってんだ。あいつは同年代の男のこと、サルの群れくらいにしか思っていないぞ」

「ほらね、言っただでしょ？ 髪伸ばしてから頼みなさいって」

麻奈実、おまえもそれ違うから。

「まあ、悪いことは言わんからやめとけ？ だいたい、なんでまた

急にそんなこと言い出すんだ」

おまえら会ったことないよな？

「え、ねーちゃんの持ってた雑誌に載ってたの見て、スゲー可愛かったから」

「そんだけかつ！……まあ、見た目は……確かに可愛いわな。てか麻奈実も、なんで桐乃が載った雑誌なんか持ってたんだ？」

「あ……うん、あやせちゃんからもらって」

ああ、そらそうだ。あいつら同じ雑誌の仕事とかしてるもんな、同じカットに写った写真もあったわ。……俺も1冊自分で買って持ってるってことは……黙っておくか。

「あ、そーだ、そのあやせちゃんでも良い」

「もつと駄目だ」

「じゃ、ねーちゃんがあやせちゃん紹介してよ！」

「うん……ごめん」

「何その泣きそうな顔！ 実の姉に同情されたっ！？」

「人間にはな、どんなに努力しても不可能な事があるんだ」

「追い撃ち！ 無理じゃなくて不可能！ なんでっ！？ ケチ過ぎるっ！ 理不尽だ！」

うるせえ、おまえにやどっちも荷が重すぎる。

「かわりにねーちゃん持ってたっていいからさあ……」

「これは元々俺んだ」

「うええええええっ！？」

しまった……失言だったな。つか麻奈実、おまえもいい加減こいつらの冗談に慣れるよ……。

「ほ……ほんとにっ！？」

「いや、やっぱ違うわ」

「ええ……ぷー」

いやおまえ、真に受けるなよ……いつまで経ってもそんなだから、逆に周りが面白がるんだっての。つか「ぷー」とか言ってほっぺた膨らますな、ただでさえ丸い顔がもつと丸くなるぞ？

「は……あんちゃん……」

「んだよ、おまえもたいがいしつこいな」

何で両手を広げて「お手上げ」ジェスチャーなんかしてるんだ。

いーからそのままそこで三味線抱えて踊ってる。麻奈実、おまえもこのバカを止めるよな。……姉として……ん？……。

「なあ」

「？……な、何っ？」

「いや……その、葛切りとめんつゆって合うの？」

「え……え？ おっ、美味しいよ？ うちの葛切りだもん」

「ふーん」

嘘付けばーか、こいつ……またダイエットとかしてやがるのか。

「おいロツク？」

「先々週から」

「あうんの呼吸でばらされたっ！？ 私より通じあってるっ！」

やつぱりか……まったく。こないだ沙織に怒られたトコだし、野暮は言わないけどさ……おまえ、別に……今は太くないぞ？

「ふーん、あ、麦茶くれよ」

「あ、ごめん忘れてた……すぐ持ってくるね」

けっ……興味があっただけだからな、物珍しさとか。怖い物見たさってやつ。

「うーむ」

なんつーか……こう……我慢するほどじゃないが……パンチとか爽やかさのない韓国冷麺食ってるみたいだなあ……まあ、食えなくはないが。

「へえ」

ロツクのアホがこっちを見てニヤニヤと笑っている。……言いたいことがあるならはつきり言ったらどうだ？ 言っても締めるけどな？

「おまえも食いたいのかよ」

気持ち悪い笑い方すんなよ……殴るぞ……？

「別に？ あんちゃんも大概ガキだなーって思っただけ」

「おまえ、俺が帰る前にタワーブリッジな？ 瞬殺するし」

俺はこれから、忙しいんだよ……大事な用事があるからな。しかし麻奈実もよくこんなの……。

「きよ、きょうちゃん！ わたしのぶん取った〜！」

「るせえ、もう食っちまったからてめーは素麵食つてろ」

「もう……」

何笑ってるんだよ？ おまえも、そのマルコメも……まったく。けど、なんつーかな、……あー……慣れたら結構食えるもんだよ……これはこれでさ。まあ、ここは俺の第二の我が家で……こいつらは……そう、家族みたいなもん……いや、家族と言ってもいいかもしれないな。血は繋がっていなくなつて、わかり合える相手がいるってのは良いもんだな。

俺は、このとき心からそう思い……ずっと続くように……と、そう願った。

## 第2章 1（後書き）

やっと地味子さん本領発揮の2章開始！……でも……勝利の方程式が見えないぜ……黒猫さん恐ろしい子っ！ 9話見て、麻奈実を吸収したのかとオモタルヨ……

## 第2章 2（前書き）

あれ？　なんか気付いたら黒猫といちゃついでるんですけど……おかしい……地味子さんはきっと逆転できる！　そのはずなんだっ！  
……orz

## 第2章 2

「よう……待たせちゃったか？」

「ええ、15分とちよつと……もう少し早く着てくれると思つていたのだけれど？」

「すまなかつたな、ちつと家まで戻つてさ」

そして、俺は今……黒猫に返事を伝えるために     あの場所

校舎裏へやってきている。あの夜のメールでは結局、内容を伝えきれず……長々と作つたメールを没にして、ぶっきらぼうな呼び出しになつてしまつたが……来てくれて本当に良かったと胸をなで下ろす。ほんのわずかだけれど、こいつが来ていないんじゃないかと怯える気持ちもあつただけに……余計に嬉しい。

「……貴方が心配していることなら大丈夫よ。部屋もさつき確かめてきた、私の力の及ぶ範囲で、周りに人は居ないわ」

「そ、そうか……いや、それは考えなかつた……」

準備いいな……黒猫。まあ、こないだは散々だったもんな。

「で、今日ここに呼び出したって事は……『返事』を聞かせてくれるのよね」

「ああ、そのつもりで来た、その……歩きながら話さないか？」

「構わないけれど」

あの時と違つて、今日の黒猫はベンチの側でずっと立っていたらしい。この間の白いワンピースではなく、いつものゴスロリスタイルだ。生地が薄いとはいえ……夏の日中に悪いことをしてしまったな。

「あまり、その……真正面過ぎると落ち着かなくてさ」

「……はあ、貴方らしいと言えばらしいけれど……」

「すまん、その……立ちっぱなしで疲れてないか？」

「大丈夫よ、今日の私は……プラ ナを少しばかり開放しているから」

「そうか……じゃあ行こうか。喉も渴いたし、喫茶店にでも行こうぜ」

「いいわよ」

黒猫が俺の先をスタスタと歩いて行く。

「なあ、黒猫……どうして俺だったんだ？」

「……前にも言ったでしょう、同じ事を二度言わせないで」

立ち止まって振り返り、ちょっと怒ったように……黒猫が言った。

「ああ、ただどいまいち自信が無くてな」

「そうね、あんな妹がいたら……さぞ自信もなくなるでしょうよ……地味だし、凡百だし、センスも今一つ……何か飛び抜けたスペックがある訳じゃなく……かといって、世俗も捨てられない半端な存在……本当に並の中の並ね……キングオブ普通の称号を授けてもいいわ」

はつきり言うね！ おまえホントに俺のこと好きなのか？ ……  
ますます自信がなくなるぜ！

「……それでも、私は貴方を選んだの。……いいえ、貴方でなければ、今の私は欲しくない」

「……はあ……格好いいな、おまえ」

「それで？ ヘタレ語りはそれでお終い？ 悪いけれど……私は貴方を慰めたり勇気づけるために来た訳じゃないのよ」

分かってるさ。

「ああ……そうだな……黒猫。俺でいいなら……いや、俺もおまえのことが好きだよ」

黒猫は、俺のその言葉を受け止めると……真剣な表示で俺の顔を見つめ、言葉を紡ぎ出した。

「……そ、そう……それは……イエスという意味で良いのね？」

ああ、それ以外の意味なんて無い。おまえが俺を好きで、俺はおまえが好きで、俺は今……誰とも付き合っちゃいないんだからな。

「……ありがとう……嬉しい」

あ、ああ……くそつ。せっかくの一大イベントグラフィックなの

に……照れ臭くて、その、まともに黒猫の顔が見られないっ！

「ほら、その……行こうぜ」

「……うん」

二人で並んで歩き出す。ちょっとだけ、手を繋ぎたいな……とか、色々してえ！とか、その……思ったけど！歯もいつもより磨いてきたけど！……タイミングってやつが……うまくつかめねえ。

「……」

「……」

そのまま、真っ赤になって……多分二人とも。黙ったまま並んで道を歩く。アスファルトからの照り返しがきつくて、汗がだらだらと流れてそうなのに……緊張のせいかな、暑さをほとんど感じない。それどころか、意識が飛びそうになるのを押さえるだけで精一杯だ。

「……ふふっ……どうしたの？」

「ん、いや……その、ああ！きつきつさて……店までちょっと歩くけど、いいか？」

「ええ構わないわよ、勿論……その、『京介』」

え……今、なんて……？

「……やっぱり今のは、無しで」

「いや、うん……てかおい……ど、どうしたんだよ黒猫っ！」

声がおかしいな……と思って見てみたら、黒猫が……涙を流して俯いている。こちらら脳天気……嬉しくてこう……「うわー！

甘酸っぱいゼコンチクショウ！ヒヤッホーこれで俺も彼女持ち！」

なんてはしゃぎそうになって……慌てて名前呼びとかとかかつ！

しようと思ったのにっ！

「なんでも、ない……ないわよっ！」

いや、だって……おまえ、泣いてるし……っ何かしたのかよ俺！

と、とにかくどこか……路上で泣かせちゃうなんて、俺が最低野郎みたいじゃないかつ！

「こっ……ほら、来いよ」

「ん……」

泣き止まない黒猫の手をひいて、近くの公園へ立ち寄る。黒猫をベンチに座らせ、持っていたハンカチを湿らせて戻ってくると、黒猫はだいぶ落ち着いた様子で大人しく俺を待っていた。

「ほら……大丈夫か？」

「ええ……ありがとう……意外と気遣い出来るしもべね、契約して正解だわ」

「なんだよそれ？ で……どっちが良い？」

苦笑しながら隣に座り、自販機で買ってきた炭酸とオレンジジュースを並べて見せる。

「お茶か水が良かったのだけれど……まあいいわ。私の好みも、これから馴けて覚えさせていかないかね」

「はいはい」

やっぱり桐乃の友達だな、憎まれ口は相変わらず……でも、こっちの黒猫も気楽で良いな。いや……白猫も黒猫も、どっちもこいつなんだよな……両方とも悪くない。

「オレンジジュースをちょうだい」

「ん、見慣れないな……これ『ポンジュース』？」

「名前も見ずに買ってきたの？」

「ん、まあ100%つてのは確かめた」

さっきまで泣いていたのが嘘のような笑顔にホッとする。

「嫌いじゃないわ、それでいい」

「猫って、ミカンとか嫌いだと思ってたよ」

「バカな事を言わないで」

「はは……はいよ、落ち着いたか？」

「ええ、見苦しいところを見せてしまったわね」

「急に泣き出すからさ、どうしたのかと思ったよ」

「分からないの？」

聞き返して、じっと見つめてくる黒猫の表情は笑顔のままだけれど……どう答えればいいのか、本当に分からなくて……。

「す、すまない……ってアレ？」

「……ふふふ……」

あ、あれ？　なんか……た、楽しそうだなおい……俺、からかわれた？

「からかつてなんかいないわ……貴方が……正直すぎて、嬉しかったの」

「なんか、底が浅いとか、分かりやすいって言われてる気がするな」  
「貴方の考えなんて、闇の能力を借りなくたってバレバレよ」

「へいへい」

どーせ単純ですよ……。ふてくされたフリをして、缶のプルトップをカシュッと押し込む。

「好きだと言ってもらえて……嬉しすぎて、泣いたのよ」

「ゲフツ！　ガゴホッ！」

むせたっ！　気管に炭酸が入っちまったっ！

「ちょ……ちよつと大丈夫！？」

「えふっ……ス、スマン。びっくりした……」

「そ……そんなに驚かないでよ！」

あ、また真っ赤になった。……なんか……こいつの照れるパターンがちつよと見えてきた気がするな。

「驚くほど……俺がおまえを好きじゃないって思ってたのか？」

「……そうね……正直、こんな風に一緒に歩けるなんて思っていなかったわ」

それなのに……おまえは俺が好きだと言ってくれたのか。

「今日も、泣きながら家に帰るつもりで出てきたのよ。貴方を引っぱたくシミュレーションを何度もしたわ」

「無駄になって良かったな」

「ふふ……そうね。………ここ、良い景色………」

「ああ、結構涼しいだろ？」

「そうね、静かだし……悪くないわ」

「そか、良かった」

オレンジジュースを飲みながら微笑む黒猫に安堵する。ああ……  
落ち着いたみたいで良かった……。しかし、こう……冷静になって  
みると……俺達、今は恋人同士なんだよな……ここは……その、や  
っぱ。

「私、あまり散歩とかしないから、近所でも知らないところ一杯  
あるのよ……貴方や、あの子に出会えて色々な世界を知ったわ……  
感謝してる」

「そうか、そりゃ……良かったよ」

ベンチを覆う藤棚の作る陰と、池の水面を撫でた風が気持ちよく  
通っていく……この間の夕暮れとはまた違った心地よい空気だ。

「よく来るの？」

「ん？ ああ、勉強の息抜きとか……その、学校の帰りに暇つぶし  
たりな」

……あれ、なんかひっかかるな。……なんだろう……また、選択  
肢を間違えたような……。

「ふうん……」

「気の利いた場所じゃなくてゴメンな」

桐乃ならきつとボロクソにこき下ろすだろうな……缶ジュースに  
公園なんて、あいつからしたら最低の部類……って何度か説教され  
たっけ。とは言え、今から改めて喫茶店つてのも変だしな……黒猫  
も、この場所が気に入ったようだし。

「いいえ、そういう意味じゃないけれど……まあいいわ」

「え？ 何」

「……何でもないわよ」

「そ、そうか」

そう言っただけのため息を漏らす黒猫。うつむ、女ってやつは……  
やっぱ分かりにくいな……俺にとって分かりやすいのって……麻奈  
実くらいだなあ……。黒猫も、さっきまではこう……ラブラブとは  
言わないけれど、なんか色々進んじやったりとかっ！ 大人の階段  
とか……いや、それは無しで、うん。

「そうね、私もちよつと焦りすぎていたわ」

「いや、確かにびっくりしたよ……」

「そうじゃないんだけれど……まあいいわ、これから、ゆっくり馴けていけばいいのよね……」

「馴れるとか……やめてくれよ」

「冗談だとは分かっているが、苦笑せざるを得ない。これから……付き合っていくとして、周りからどんな関係に見えるかと思うと……まあ、それはちよつと困る。」

「あら……貴方、どう見てもMよ。まさか自覚がなかったの？」

「全く無いとは言い切れないが、認めたくはないな」

「てつきり、あの子のせいで目覚めたのだと思っていたわ」

「そりゃ勘違いだ、桐乃が無茶苦茶過ぎるだけだ。……あんな暴君の前じゃ誰だつてそう見えるさ」

むしろ、桐乃と張り合えるおまえが凄いんだよ。

「相変わらずなのね……自覚がないのもたちが悪いわ」

眼を細めて笑う黒猫。つたく……どういう意味だよ、それ。てーかまだ、目の周りがちよつと赤いぞ。

「おまえらは一体、俺をどんな目で見てるんだ？」

「見たまんまよ、シスコンの変態、これ以上に貴方という存在を適切に表現する言葉はないわ」

率直なご意見感謝します！ でもフォローして！

「あなたみたいなケダモノ……放し飼いには出来ないわ。だから、私が契約してあげるの」

「光荣だよ、我が君」

ひねた物言いだけど、こいつらの言葉が分かるようになったんだから、俺もどっこいどっこいだな。

「貴方はまだただだけれど……私の側に仕えることをゆるすわ……」

「へいへい……なあ、その」

「何よ、言いたいことがあるならはつきり言いなさい」

「うん、さっきの話だけどさ……その、俺のこと……ど……どう呼

ぶかなー……なん、て？」

……あ、また赤くなった……あー、うわー、顔真っ赤だ！  
やべえ、抱きしめてえ！

「はっ……破廉恥なっ……せ、『先輩』で良いでしょう……何か問題があるのっ？」

おお、動揺しとるな。だが……俺も負けんくらい動揺してるぞっ！  
自慢じゃないけどな！

「いや、その……せっかく……と思ってさあ、さっきも言いかけて……」

「ま……まさか……今更『お兄さん』の方が良いというの……？  
よ、予想以上に重症ね……」

「それはないから！」

「と、とにかく……忘れなさい……これは命令よ。もしさっきの事を思い出したら……八つ裂きにして地獄の底に封印して、二度と出られないようにするわよ？」

おっかねえ！　けど……ま、命令じゃ仕方ないよな。

「仰せのままに」

「でも……そうね。もし、恋人に……私のことを『本当に』好きになってくれるなら……その時、もう一度……返事の代わりに……『瑠璃』って呼んで」

……え……？　どういう……意味だ？　返事なら……今日、さっきただろっ？　そんな戸惑いが、顔に滲んでしまっ。

「分からなければそれで良い、気付いていないならそれも良い。だけど……私は『貴方たちには』嘘をついて欲しく……つかれたくないの」

「俺は嘘なんか言つてねえ、おまえが好きだったのも本当だ」

「そうね……嘘ではないわ……本当なのも知っている。……でも、それは本当に本当？　曇りなき真実？」

……何を言ってるのか、分からねえよ。

「言っている意味が……すまん」

「私の独白に茶々を入れないで。……そうね……私は、貴方を失いたくない、いいえ……貴方たちを失いたくないの。だから……もう少しだけ、時間をちょうだい。これは……必要なことなの」

何て言うか生殺しだな……けど、真剣なのは分かる。というか、こいつは今日、何一つ嘘をついちゃいない。……それだけは信じられる。

「わかったよ」

「あまり物わかりがいいのもムカつくわね……私に魅力がないわけじゃないから、ただのヘタレなのね」

「ほっとけ」

「手くらいなら……握っても……いいのよ」

かわいすぎるんですがこの猫！ 今すぐ……お持ち帰りしてえ！でも……うちの茶トラとは相性が悪そうだしなあ……

「何かるくでも無いことを考えている顔ね……ちよつとは素直に喜びなさいよ……ほ、ほら」

ああ、やつぱり照れてやがるんだな……ふと、既視感が脳裏をよぎる……あの時、ひよつとして……あいつも……。

「い、いや……その……手、くらいでつてのもなん、恥ずかつ」

「……どれだけヘタレなの……貴方」

るせえ！ 純朴な高校生を舐めるな！

「まあ、いいわ……今更焦ることもないし……ね」

「う、うむ。こういうのは雰囲気だな」

「じゃあ、そうね……こうしましょう。一つ、相談があるのだけけれど……聞いてくれる？ それを叶えてくれたら……ね」

是非もない……聞くさ、おまえの言う事なら……何だってな。

「あの……ね」

黒猫が俺の手のひらに、自分の手のひらを重ねてきて……体をすり寄せてきた。本当の猫がするみたいに、目を閉じて肩を寄せ……それから俺の耳元で「相談」を、そつとつぶやいた。



## 第2章 2（後書き）

うつむ……やはり俺には黒猫愛が足りないようで、電波が上手く受信できない……ここは……恥を忍んで敵陣の黒猫キヤラスレに侵入すべきか……でも、ボツコボコにされて簀巻きにされて捨てられそうだしな……うつむ。

つか、アニメ二期決定の噂で死にそうだよママン……二期なんて地味子死亡のお知らせじゃねえか！ゝ（ゝゝ）ノウワァン  
はぁ……いや、でも頑張ろう。まだ三分の一も来てないんだっ！

## 第2章 3（前書き）

また地味子さんがいねえ……でも、明後日の放映ではちょっとだけだけど……

多分最後だけど！ 出番があるぜ！ ばんぢゃーい！  
さて……頑張って続き書こう。

## 第2章 3

俺が黒猫に返事をしてさらに数日後……俺は合宿から戻ってきた桐乃と一緒に

に、再び渋谷へとやって来ていた。この間の事もあるし、なんであつさり？

と思わなくもないのだが……桐乃の方は何事もなかったかのように平然として

いるので、こちらからわざわざ地雷を踏みに行くこともないだろう。

「相変わらずここはすげーな、俺はやっぱ落ち着かん」

「相変わらずのかつぺなのは分かってるから、脱かつぺのために来たんでしょ？ かつぺ」

「三回も繰り返すなよ」

「うるさいわね……あんたがキョドつてると、あたしの方まで恥ずかしいから近寄らないで」

……とまあ相変わらずの調子で、仲良くなったというわけでもないのだが。

「だいたい頼んできたのあんたでしょ？ 『どうしようもなく惨めでダサい服しか持つていない私をお助け下さい』 って、泣きながらすがってきたんじゃないん」

「記憶を捏造すんなよ！？ 確かに頼んだのは俺だけだよ！」

「はいはい、とつとと行くわよ……あんたのために合宿あけの忙しいスケジュールを空けたんだから、無駄にしないでよね」

「へいへい……ったく。どーせ俺はユニクロが半分占めてるような男ですよ」

自分の服に使える小遣いなんてもらったの最近だぞ？ どの高

校生がブランド服買い漁れるってんだよ、そらおまえみたいなモデルで稼いでるような奴ならともかくな……と、さっきまでは思っていたのだが、ここに来て意識してみると、周りは明らかにそうと分かる服やブランドの小物やバッグで武装した

精兵ばかりで……自分の残念さを思い知らされてしまう。そこにこの桐乃のトドメですよ、もう自信なくすね！

「……ユニクロだって、バカにしたもんじゃないわよ、無地が多いから使いやすいし、最近はそれほど縫製や生地も悪くない」

あら、意外。おまえそういうのバカにしてると思ってたよ。

「あ、そうなんだ」

「あたしは使わないけどね……インナーに使うとか、ちょっとイジればそれなりよ。何年も前のブランドものをヨレヨレにするまで着るよりずっとマシ」

「へー、じゃあ今までのでも良いのか。つーかブランド物って長く使えるから良い物なんじゃないの？ よく言うじゃん」

俺だってそのくらいの知識は持つてるぞ、と主張してみる。

「アンタのは論外よ、洗い晒しじゃん。それに長く使えるブランド物ってのはまた別なの、そういうのは中高生が買えるような値段じゃないし、使い方やメンテも難しいのよ。私を見る限り、二十歳前で味の出たブランド物を使ってる人なんてほとんど居ないわ」

「ふーん、ブランド物なら良いって訳じゃないんだ」

「……そうよ、安くたって良い物はある。使い方や着方、本人の姿勢一つで全然違うのよ」

「なるほど、勉強になる」

「……もういいわ、あんたに言っても分かってないだろうし、とつとと次行くわよ」

相変わらずファッションの事になると饒舌だな。アニメやエロゲの事でもそうだけど……こいつ本当にお洒落のことも、ゲームや……それ以外のことも、全部が同じくらいに好きなんだろ。それこそ『同じくらい』に。散々な言われようだが、恥を忍んで頼んでみ

て良かったな……と、心の中で黒猫に感謝した。

そう、今回こいつと一緒に街に来たのには訳がある。もちろん、今言ったように「俺の服を見繕って貰う……」というのも理由の一つではあるが、黒猫に頼まれた「クエスト」も果たさなきゃいけない。あの日、俺が黒猫に返事をして、俺達が恋人同士になったその日に公園で黒猫が囁いた「お願い」の内容はこうだ。

「あの女　貴方の妹が普段服を選ぶショップを見てきて頂戴。……それがあなたの『クエスト』よ」

黒猫はそう言った。クエストってドラクエのあれかな……「使命」とかそんなんだっけ。

「そんなの、桐乃に直接頼めばいいんじゃないか、この間の服も桐乃に頼んだんだろ？」

「そ、そうだけれど……できれば自分……と、でも、選んでみたいの。でも、私はああいうお店のことに詳しくないし……その、また……」

「？　どうした？」

「……　……　エロゲの服を着せられたら　……」

「ああ……　そ、そうだな……」

妹が迷惑をかけた……心の底からスマン……。似合ってたし、あいつも悪気はなかっただろうが……嫌だよなあ、やっぱり。世の中には、エロゲやアニメキャラの名前を子供につけたりする親も居るそうだが、どんな綺麗な名前だろうとその由来を知ったなら、グレてもおかしくない……俺なら3日くらい田村さん家に逃げ込むよ……。

でも似合ってたのにな……あれから着てないと思ったたらそれが理由か、白猫がもう見られないかと思うとちよつと……ちつよとだけガツカリだ。

「わかった、そういう理由なら聞いておく……ああ、でも直接聞くのは変だな」

「そうね……それじゃあ『大学デビューしたいからカッコイイ服と一緒に見繕ってくれ』なんてどう？」

「俺ってデビューが必要なのかよ！　というか妹にそんなこと頼む俺が痛々しい！」

「あら、私は楽しいわよ。想像するだけで……笑いが止まらないわ酷薄な笑みを浮かべて俺を見上げる黒猫……こ、こいつ……」。

「でもなあ……多分無理じゃないかな」

「無理って？　そんなに難しい任務かしら」

「いや、そうじゃなくてさ……この間ちつよとその、喧嘩みたいな事になっちゃってさ、あれから口聞いてない」

そのまま合宿に戻ったみたいだしな……結局、ろくに顔も見えていない。しかも事が事だけに……ちよつとやさつとじゃ許してはくれないだろう。

「いつもの事じゃない」

「いや、その……今回は流石にあいつの顔が見られないし……会わせる顔もない……ど、どうした」

見れば、黒猫が目を見開き、ワナワナと肩をふるわせている……

「ま……まさか……あ、貴方たちとうとう……」

「ん？　いや、主な原因は俺のせいじゃなくてな」

赤城のバカのせーだよな、どう考えても。

「んなつ……ま、まさか……あの女から仕掛けたというの？　よ、予想外だわ……い、いくらなんでも……」

「いや、いきなり部屋に来たのは確かだけどな、俺も寝ぼけて油断してたし」

「ね……寝ているところを襲われたとっ！？」

エクスクラメーションマーク付きのセリフは珍しい、よほど驚かせてしまったか？　でも、あんま詳しく話せないしな……一応、瀬菜とかの耳に入るとまずいし。

「ん、まあ……それで、泣かせて噛みつかれて散々だったよ……ほら、まだ傷が治らない……黒猫さん？　もしもし？」

なんか様子がおかしいな、ああ……でもこないだ喧嘩したとこだし、打ち上げでもちゃんと仲直りできたかつーと、ちよっと怪しいもんな。

「そ、それで……最後は……ど、ど、どうなったの？」

「ん、いや泣かれたし噛まれたしで、そのすぐ後に土下座して平謝りして……一応許してもらった」

「そ……そう……た、大変だったわね」

「おう、散々だった」

「……さ……最後まで……ったのね……良か……」

「何か言った？」

小声で聞き取れなかったぞ。

「な、なんでもないわ。……大丈夫よ……安心しなさい。あの子はあなたの頼みなら断らないはずよ」

ええ……そうかなあ……？　……たった5分ばかりの相談だって、すつつつつつごい大変だったんだぜ……弁護士の窓口相談だってもうちつよと敷居が低いっつーの……行ったこと無いけど。そら、こんだけあいつのために頑張ってるんだし、ちよつとくらい俺の言うこと聞いてくれても良くね？　とは

思ったりするけれど……いや、やっぱり兄貴として見返りとか考えちゃ駄目だな、うん。

「まあ、一応頼んでみるか、でも駄目だったらゴメンな」

「大丈夫よ……なんなら、また呪いをかけてあげましょうか？」

「是非つつつつつつつつ……！！！！！！！！」

「………やっぱりやめておくわ……」

なんでっ！　そんな殺生なっ！

「そ、そんなあからさまに落ち込まないで頂戴………任務達成の暁には、その……褒美を授けなくもないから」

「マジでっー！」

「……前向きに善処したいと思うわ。それに、多分あの子は断らないわよ」

「そうかなあ……」

……とまあ…… そんな理由もあって一応「ムリダヨナー」と思  
いながらも

「今度、服選びたいから付き合ってくんね？」  
って言ったら、

「………いつよ……忙しいんだから、あんま時間取れないけど」

って、意外なほどあっさりオーケーしやがったんだよな、コイツ。  
まあ、仏頂面は相変わらずだったけど……その上「お昼とか全部あ  
んた持ちだかんね」ときたもんだ。そのくらいならおやすい御用、  
と臨時収入（結局、赤城と瀬菜2号の宿泊費は2万に負けてやった）  
もあって安請け合いしたが……。

「しかし、意外と高いな」

「そうかな、レディースに比べたら、メンズは安いよ？」

……これで安いのか……以前コイツと09に来たときも思ったが、  
ちゃんとした服って高いんだな……。周りの連中は一体どんな風に  
して揃えてるんだろう、やっぱバイトか。

「ふうん……そんなもんか。あ、これとかどうだ？」

手近にあった服を1着取ってみる。色こそ地味だが、周りの奴ら  
がこんな雰囲気のを着てるし……アリじゃね？

「論外」

「バツサリだな！ 流行っぱいのに……」

「流行ってるって言っても、みんなが着るようになったらもう終わ  
りよ。そもそもあんだ、自分に似合うかどうかとか考えずに周りの  
人間の真似したか、一夜漬けでファッション誌見て、その中で大  
人しそつなの選んだだけでしょ？」

「おまえまた俺の部屋漁ったの!？」

メンズノンノは今朝出かける前にダンボールの中にしまったはずだ！

「……まさかホントに層だとは思わなかったけど……まあ、その辺がせいぜいよね」

「うっ……そうは言うけどさ、周りの連中だってそんな服に金かけてるやついないぜ？」

「そりゃ、あんたの周りがそうなんですよ。あたしの周りは違うし」

「あやせとかおまえと比べられてもな」

「何、妹の友達を普通に呼び捨てにしてんのよ……キモ……まさかと思うけど」

「い……いやっ！ それは断じてない！」

「というか瞬殺されたし！ 無理だし！」

「……なら良いけど……そうよね、そもそも着拒されてたくらいだし」

「さらっと俺の傷を抉るな」

「だいいち、なんでそんな事になるのよ？ そもそも勝手にメアド交換とかあり得くない？」

「何度も繰り返し返すが、交換しようと言ってきたのはあいつだ」

「まあ、いいわよ……そういう事にしておいてあげる」

「本当なんだが……まあ、おまえが思ってるような理由ではなかったけど……誠に遺憾ながら。」

「これ、ちよつと着てみて」

「ん……おい、派手じゃないか？」

「あんたみたいな地味なのは、それくらいの方が良いのよ……ほら、こっちのジャケットと合わせてみて」

「この暑いのに？」

「そら、ここはクーラー効いてるけどさ。」

「………まさか………と思うけど、今更夏物を買おうと思ってたの？」

「え……だ、駄目？」

な、なんか……怒りでも……諦観でもない……憐れまれている気がするぜ……っ！

「で、でもホラ、今なら夏物がセールだし」

麻奈実とか、毎年大喜びで買い物行ってるぞ。……たまに「これ、きょうちゃんに似合うと思う」とかって変なＴシャツ買って来るのが微妙だけど。

「……着回しのきく物や定番ならそれでも良いけど……」

「う、すまん。今日はおまえの見立てに任せるんだった、頼むよ」

ここで機嫌を損ねられたらたまらん。……ご褒美のためにも踏ん張らないとな。

「……とりあえず、羽織るだけしてみて」

「おう」

「……」

「……ど、どうよ？」

「……………素材が地味すぎて、駄目ね」

「だから俺もそう思ったよ！？　なんでわざわざ追い撃ち！」

「ちっ……っさいわね……」

少しくらいさあ……なんつーかホラ、俺って褒められて伸びるタイプだし！

「あと、予算も………これ、一着で二万とかするんだけど」

「そんなもんでしょ？」

さっきも思ってたけど、これって絶対素で言ってるよな……金銭感覚に違いがありすぎるわ。

「その……もうちつよと手頃なトコで頼む」

「バイトくらいしなさいよ貧乏人」

「受験生に何を言うんだおまえは、ただでさえ今年の夏は同人誌作りやら部活で忙しかったというのに」

「全力でヘラヘラしてたくせに、黒いのかと写真撮ってニヤニヤしてたじゃん」

う……そう言われると痛い………というか、俺まだ言っていないんだ

よな……黒猫とのこと。今のうちに言っておかないと、やっぱり駄目だよな。

「なあ桐乃」

「じゃあ、こっち着てみて。これならあんたにも……合つと思う」

「お、おう」

まあ、今ここで言う事もないか……と渡された薄手のジャケットを羽織ってみる。そのまま鏡の前に立つと……我ながら、なんだか服に着られているような感じがした。

「……」

「おい」

「……うーん」

「……」

真剣だな……こいつ、やっぱりファッションについては妥協しないんだよな……黒猫に頼まれたからとか、そういうのを抜きにしても頼んで正解だったかもしれない。ただ、できれば俺の財布の中身も考慮してくれると助かるんだが。

「ちつよと待つてて」

「お、おい。これはいいのか？」

「そのまま持つてて」

「あ、ああ……」

鏡の前で所在を無くした俺を放置したまま、棚の方へ向かった桐乃がシャツやらを色々と選んでいる。情けない話だが……置いて行かれた幼子のように、ものすごく心細い。……仕方ねーだろ……苦手なもんは苦手なんだよ！

「ほら、これも着てみて……って何してるのよ」

「ん、いや……別に」

お、おかしかったか？ 自然に服を選んでたつもりだったんだけど……。

「あんまりオロオロしないでよ、みつともない」

「そ……そこまで言わんでも」

「いいから、はい試着室はあっち。早く着てきて」

「へいへい……つつく」

ちつよとても感心して損したぜ！……これ、着るのか……なんかサイズ小さくないか？……あ、合ってるのか……今の服って細身がおおいのな。

「できた？」

「ちよ、おいっ！ 覗くなよ！」

「良いじゃない、別に減るもんじゃなし。つかあんたの貧相な体見てもなんにも嬉しくないし」

「良くねえよ！？ おまえは見られても平気なの！？」

うあ、リアが来たときのこと思い出しちゃったじゃねえか！ ……

……つつく、つか、なんでおまえが赤くなってるんだよ！

「な……何思い出してんのよ……まさかあんだ……」

「ないから！」

「……まあいいわ、そのまま後ろ向いて」

「……？ おう」

言われるままに後ろを向く。……つか二人で入ると狭いなあ…………つておい！

「……何よ」

「い……いや……き、桐乃……さん？」

お……思わず妹をさん付けで呼んじゃったぜ……だが……今、俺の妹がやっている行為を見れば、俺の驚きを諸君にも分かっていただけのはずだ……。なぜなら……桐乃が、この狭い試着室の中で……俺に後ろから抱きついてるっ！……あ、有り得んっ！……

「なっ……なに誤解してんのよ……！」

「い……いや、誤解も何も、俺を後ろから抱きしめてるのっておまえだよな……？」

「ち……違っわよっ！ 胸囲を測ってただけなのに変な誤解すんなっ！」

「へ……きよ、きょうい？」

「……な……なんだと思ったのよ、あんた……」

「い、いやその、いいから、離れるよ………暑いって」

つつか背中になんか当たってんだよバカ！ あとおまえ、い……意外と……。

「意外とあるのね」

「おうえっ!？」

「何壊れてんのよ………太った？」

「ち、違………そうならそうと先に……」

つーか離れる！ 海綿体が危険だ！ 匂いとか！ 俺落ち着いて死ね！

「……もうワンサイズ上ね。そのまま待ってて」

い、いや………もう勘弁してくれ………胸囲くらい、メジャーで測つて来ときゃ良かったぜ……。冷や汗を拭っていると、いかにもな営業スマイルを貼り付けた店員が接近してきた。

「彼女さん、すごい美人ですね〜！ あ、こちらよろしいですか？」

「あ、はい………いや、あいつは」

少し小さかったジャケットを脱いで店員に手渡す。

「直しもすぐできますんで、言ってくださいね」

「あ………はい」

うーむ、やっぱり恋人に見えてたりするんだろうか。訂正し損ねてたのを見られたら、また桐乃にキモがられるな。

「何やってんの？」

「………っ！ いえっ、何も！」

「ふん、まあいいけど………サイズ違い無かったから、次行くわよ京介」

「え、おい」

試着するだけして買わずにいられるってのが凄いなー。麻奈実とかだったら上から下まで一揃い買わされてるぜ。もっとも、あいつはそうやって色々おしゃべりしながら買うのが好きみたいだからいいけどさ。………てか、今「京介」って呼ばなかった？

「なあ、桐乃……もうこないだみたいな恋人偽装はしなくて良いんだろ？」

「……！ う、うつかりしてたのよ！ 何反応してるのよ、バカじゃないん？」

何赤くなってるんだか、おまえの方がバカっぽいつてーの。

「へいへい」

「こういうところではテキストに話合わせとけばいいの、いちいち訂正するのが面倒でしょと、とにかく……言ってみただけよ！ こないだのくせが残ってただけ！ だいたい何よ！ 黒いのに『兄さん』とか呼ばせてニヤニヤしてたくせに！」

「おい、そんなおまえ……いつの話だよ……」

そんな怒ることかよ、あいつがおまえをからかうためだけにやったのは分かるけどさ……多分……。まあ突っ込んだら怒ると思っただけどよ、なんかムズムズすんだよ……こないだの事もあるし。

「こんなとこ来るのリップルしかないんだから……いちいち訂正しなくても良いわよ……向こうだって挨拶代わりに言ってるだけなんだから。こういう所でわざわざ『彼女じゃありません』なんて訂正してたらウザいだけだから、テキストに話合わせときゃいいのよ」

「別に、おまえがいいなら良いけどさ」

こないだあんだけ気持ち悪がつてたくせに理不尽なやつだ……そんなに面倒くさいかね。あとやっぱり見られてたか……そら機嫌も悪くなるよな。

「忙しいんだから、次行くわよ」

「分かった、それはそうと、おまえは良いのか？ 服とか見なくて忘れかけてたけど、黒猫に頼まれた調査もしっかりやっとなかないとな。」

「え……うん、先にあんたの終わらせて……と思ってたけど……見に行っても良い？」

「別に良いよ、俺は急がないし」

「ん、分かった……じゃあ、行こっか」

「おう、任せる」

良い笑顔だなー、秋葉原でフィギュアに目を輝かせてたときと全く一緒だよ。やっぱ、お洒落もアニメも、みんな揃ったの桐乃なんだな……と改めて思う。それから、フロアを移動してレディースのショップに移動したわけだが……。

「……っ……居っずれえええええ……」

……なんていうのかな……ほら、こう……凄え場違い感……前に一緒にクリスマス取材をしたときも感じたけど……やっぱ住む世界が違うな。麻奈実と一緒にデパート回るときなんかは、まだマシなんだが……同じ女性服でもフロアが違っただけでこうも違うとは……下着売り場や化粧品コーナーのように、息を止めて走り抜けたくなる感覚だぜ。

昔家族でデパートとか出かけたときの親父もこんな気持ちだったのかな……そら逃げるわ！ 普段厳しい親父がずいぶん優しいと思っってたんだ……デパートの屋上では小遣いまでくれるし……つかこの年で父親の気持ちが分かっちゃ俺も大概だよな。

「俺、そこで待ってるわ」

「ん」

あれ、あっさり開放されたな……いや、束縛されたかった訳じゃないけどさ。これが麻奈実とかだと「きょうちゃーん、これとこれ、どっちがいいかなあ？」とかしつこいのに、しかもあいつ何言っても「じゃあそーする」ばっかだしな。なんか張り合いがない。まあ……

「アンタのセンスとか期待してないから」

……コイツよりはマシだな、うん。店を出たところのチェストに座っていると、店員さんがコースターに乗せた麦茶を持ってきてくれた。

「彼氏さんもうござ」

「あ、ど、どうも……」

やっぱそう見えるんだな、まあ……一緒に服を選びに来る兄妹と

か、あんまないよな。認めたくはないが、傍から見ればどー見たってデートだし。……どっかの変態不良債権兄妹はともかくとして。

……そんなことを考えながらぼーっとして麦茶をちびちびと飲んでいると、30分ほどで買い物を終えた桐乃が店から出てきた。てかおい……

「へっへー！ セール品に良いのがあったんだ！ らっき」

「ご機嫌だなおい……さっき俺、セール品について突っ込まれた気がするけれど、それ言っちゃ駄目なんだろうな。」

「なあ……買い過ぎじゃないのか？」

「え？ 大丈夫だよ？ 安かったし、今日は荷物持ちいるし」

「それ俺だよー！？」

文句を言いながらも反射的に受け取ったけどさ……こいついつか締めなきゃいかんよな、絶対。俺の布団に間違っで潜り込んできたところを狙って蹴り出すしかない。……まずそのシチュエーションがないけど。

「じゃ、今度は……」

「まだ買うのかよ！？」

結局……その後も何軒か店を回り、桐乃のお目当てを巡回し終える頃には、俺の両手はすっかりふさがってしまっていた。指に持ち手が食い込んで痛えよ。布のくせに重いつてどんだけ……。

「なあ……おい、俺の服もそろそろ買いたいんだが」

「ああ、そうだった。忘れてたわ……じゃあ喉渴いたから先にお茶」「『じゃあ』の使い方が間違ってないかおまえ！？」

「うるさいな……あんたが頼んできたんだから、あたしの希望が優先されて当然でしょ、文句言うなら先に帰れば」

「……ったく、分かったよ」

ちよつとは可愛げが出てきたかと思っただけど、全っ然！ 変わってないよな……。とは言え、俺も疲れたしちよつと座って休みたいのは確かか。

「お、ここなんかどうだ」

「いいんじゃない？」

あら、一発オーケーは珍しい……。案内板で見て一番近いカフェを選んだだけなのに文句がないとは思わなかった。まあ、こういう建物に入っているだけあって、見かけるショップやらがどれもこれもお洒落っぽいし、平均以上の店なんだろう。実際今入ったここも、モノトーンと暗い木目で統一されてすっきり

した……。というか綺麗すぎて落ち着かないくらいに洒落た店構えだ。「ふー、疲れた……。おい、メニュー取ってくれ」

「今あたしが見てるんだけど……。普通こういう時って、女の子に先に選ばせない？」

「知るか、なんでもいいからさっさと決めて見せろ」

「あんたがモテない理由が分かった気がする」

「ほっとけよ！ つうか……。あんな……」

うーん、これは、今言つとく流れだよな。一応、その……。こいつのお陰で黒猫と知り合って……。俺の友達だったという前に、こいつの親友だったんだし。

「なあ、桐乃」

「……。何よ」

「その……。黒猫のことなんだけどさ」

「……。何よ、あの黒いのがどうかしたっての、自分の彼女なんだから、いちいちあたしに聞かないでよね」

「余計なお世話だ、頼るような事は……。ってなんで知ってんだ？」

「なんでって……。黒いのから聞いたに決まってるじゃない」

あ……。あーそう……。な、なんか拍子抜け過ぎる……。こっちはどう言ったもんかな……。とか、ずっと悩んでたのに……。……てか黒猫も、言ったなら言ったで教えてくれればいいのに……。

「き、聞いてたんなら言えよ……」

「なんでいちいち、あたしがあんたのコイバナとかに付き合わなきゃいけないのよ、バカみたい。そんなの……。絶対有り得ないから」

「分かったよ、おまえにや聞かぬーよ。ぜってーに」

くそ、なんか俺がバカみてーじゃないか。しかも露骨に不機嫌だし……前にも思ったけど、ホントに……ある意味仲が良いよな。俺に嫉妬するくらいとはね……。

「ご注文はお決まりですか？」

「あ、あたしはアイスモカチーノ、あんたは？」

店員さんがお冷やをトレーに乗せてやって来た。つつか俺、まだメニュー見てないんだけど……。

「え、い、いや……その……ホットで」

「かしこまりました」

うわ、この暑いうえに喉渴いてるのにホット頼んじまった……さつき飲んだ麦茶だけじゃ足りないのに……後でお冷やのお代わりもらうか。

「ホットねえ……この暑いのに」

「うるせえ、おまえがメニューとつとと渡してくれればこんな事にならなかつたんだよ、俺だって冷たいのが良かったんだ」

「うわ、女の子のせいにしてる、サイテー」

何その目！　どんだけ理不尽なんだよ！　つつか妹は「女の子」に入れないだろフツ！。

はあ……もういいや、黒猫に頼まれた依頼はもう大方達成したし……とつとと帰ろう。……いや、あと、一個だけ頼んでみるか……これだけは……俺のセンスじゃどうにもならんし……。

「お待たせしました、アイスモカチーノとブレンドです。ご注文は以上で宜しいでしょうか？」

「はい」

「おう」

……んー……やつば夏にホットは微妙だな。なんだっけ？　桐乃が頼んだやつ、はやってんのかな。

「なあ、それ美味しいの？」

「……っ！？　な……何よ！　あ、あげないわよ」

……そ、そこまで。



と一緒で、生きている世界が別だしな。

「ほつとけよ、どうでもいいだろ。……でもまあ、服やアクセ選びに付き合ってくれるのは正直助かるよ」

「黒いのは……あたしの友達なんだから……良いやつだから、別れないでよ」

「言われるまでもねえ」

結局、仲が良いよな……おまえ達。そんなに心配しなくたって、大事にするよ。

「ちよつとぐらい嫌なことがあっても我慢しなよ」

「へいへい」

「でも、どうしても、どうしても……どうしても駄目だったら……別れてもいいけど」

「そこまで念を押さなくても、大丈夫だよ……ったく」

「ただだけ信用無いんだ俺。」

「今日もね、前に……だいぶ前だけど、黒いのから言われてたのもあったのよ、あんたのどーしようもない服装をどうにかしてあげたらって」

「ああ……そういうことか」

なるほど、黒猫が言っていた「大丈夫」ってのはそういう事か。

助かるけど、そこまでするなら素直に頼めばいいのに……。つか、

彼女……ひよつとしたら告白前かもしれんけど、その相手から服の駄目だしされてたって……桐乃にボロクソ言われるより落ち込むな

……。麻奈実とかには、そういう風にストレ

ートな駄目だしを言われたことがないだけに、余計だわ。……まあ、

あいつはあいつで……ナチュラルに「うーん、それは似合わないかな」とかって地味いゝに俺のボディを打つんだけど。

「で、どこいくの？ ここの中にも何軒があるけど」

「ん、この間……と言っても、もう一年近く前か。おまえが連れて行ってくれたアクセのショップあっただろ？」

「……え……」

「あそこ、値段も手頃でセンス良かったし、俺の予算でもいけそうだから、また連れてってくれよ」

一人じゃ入りにくいし！……うあー、コーヒーまだ熱いな。

「……ふうん、でも………遠いから面倒だしやだ」

そんな遠かったっけか。

「うーん、でもあつこ良さげだったんだよなあ、黒猫に似合いそうなのもあったと思うし。ここにある店のつて、どっちかと言うとおまえやあやせに似合いそうなのが多いし」

「そうかも……ね」

「後で良いから、まだ買い物あるなら付き合っし」

「ううん、もういい………ちょっと疲れたし」

荷物持つてる俺もけっこう疲れたんだけどな。

「そか……大丈夫か？」

「疲れたから帰る」

それだけ言つて桐乃はいきなり立ち上がり、俺の隣に置いてあつた紙袋をまとめて掴むと、止める間もなく桐乃は店を出て行った。

テーブルに……飲みかけのモカなんとかを残したままで。追いかけようかとも思ったが、伝票も会計もまだだし、もう追いつけないだろう。なんだよあいつ………また急に機嫌損ねやがつて………やつぱこないだの一件、まだ怒ってたのか………もしくは、本当に疲れてたのかもしれないな。

………だとしたら、無理に頼んで悪いことをしたかもしれない。憎まれ口に紛れていたけれど、風邪が治ったばかりで陸上部の合宿に参加して帰ってきたばかりだった訳だし。

「よし」

たまには兄貴らしいことでもしてやるか………そんな事を思いながら、まだ熱いコーヒーを急いで飲み干す。つーか、今の俺つて、どー見ても痴話げんかで置いていかれたみたいだもんな………全く、扱いにくい妹を持つと苦労するぜ。



## 第2章 3（後書き）

ネタくれたスレ民ありがとう！ 次からは絶対地味子さん無双！

……桐乃がちつよと可哀相になってきたので、桐乃ファンの人は  
ごめん……なんか……どのキャラも泣いて欲しくないんだけどな……  
……うーん……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2343p/>

---

俺の妹がこんなに可愛いわけがない8巻っぼいの（地味子編）

2010年12月11日00時42分発行